



Red Hat Enterprise Linux 8

パブリッククラウドプラットフォームへの Red Hat Enterprise Linux 8 のデプロイメント

Red Hat Enterprise Linux のカスタムイメージの作成およびパブリッククラウドプラットフォーム用の Red Hat High Availability クラスターの設定

Red Hat Enterprise Linux 8 パブリッククラウドプラットフォームへの Red Hat Enterprise Linux 8 のデプロイメント

Red Hat Enterprise Linux のカスタムイメージの作成およびパブリッククラウドプラットフォーム用の Red Hat High Availability クラスターの設定

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2021 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Deploying_Red_Hat_Enterprise_Linux_8_on_public_cloud_platforms.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

カスタムの Red Hat Enterprise Linux イメージを作成して、Microsoft Azure、Amazon Web Services(AWS)、Google Cloud Platform(GCP)などのさまざまなクラウドプラットフォームにデプロイできます。各クラウドプラットフォームに Red Hat High Availability クラスタを作成し、設定することもできます。本文書には、必要なパッケージおよびエージェントのインストール、フェンシングの設定、およびネットワークリソースエージェントのインストールなど、HA クラスタを作成する手順が含まれます。各クラウドプロバイダーには、カスタムイメージの作成およびデプロイを記述する独自の章があります。また、各クラウドプロバイダーの HA クラスタを設定する章も別途用意されています。

目次

オープンソースをより包摂的に	5
RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)	6
第1章 MICROSOFT AZURE での仮想マシンとして RED HAT ENTERPRISE LINUX 8 イメージをデプロイ	7
1.1. AZURE での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション	7
1.2. ベースイメージの理解	9
1.2.1. カスタムベースイメージの使用	9
1.2.2. 必要なシステムパッケージ	9
1.2.3. Azure VM 設定	10
1.2.4. ISO イメージからのベースイメージの作成	10
1.3. MICROSOFT AZURE のベースイメージの設定	11
1.3.1. Hyper-V デバイスドライバーのインストール	12
1.3.2. 追加の構成設定の変更	13
1.4. イメージの固定 VHD 形式への変換	15
1.5. AZURE CLI のインストール	16
1.6. AZURE でのリソースの作成	17
1.7. AZURE イメージのアップロードおよび作成	20
1.8. AZURE での仮想マシンの作成および起動	21
1.9. その他認証方法	22
1.10. RED HAT サブスクリプションの割り当て	23
1.11. AZURE GOLD IMAGE での自動登録の設定	23
第2章 MICROSOFT AZURE での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定	25
2.1. AZURE でのリソースの作成	25
2.2. 高可用性に必要なシステムパッケージ	29
2.3. AZURE VM 設定	30
2.4. HYPER-V デバイスドライバーのインストール	30
2.5. 追加の構成設定の変更	32
2.6. AZURE ACTIVE DIRECTORY アプリケーションの作成	34
2.7. イメージの固定 VHD 形式への変換	35
2.8. AZURE イメージのアップロードおよび作成	36
2.9. RED HAT HA パッケージおよびエージェントのインストール	37
2.10. クラスターの作成	39
2.11. フェンシングの概要	40
2.12. フェンスデバイスの作成	40
2.13. AZURE 内部ロードバランサーの作成	43
2.14. ロードバランサーリソースエージェントの設定	43
2.15. 共有ブロックストレージの設定	44
第3章 AMAZON WEB SERVICES での EC2 インスタンスとしての RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージのデプロイメント	50
3.1. AWS での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション	50
3.2. ベースイメージの理解	52
3.2.1. カスタムベースイメージの使用	52
3.2.2. 仮想マシン構成設定	52
3.3. ISO イメージからのベース仮想マシンの作成	53
3.3.1. ISO イメージのダウンロード	53
3.3.2. ISO イメージからの仮想マシンの作成	53
3.3.3. RHEL インストールの完了	53
3.4. RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージの AWS へのアップロード	54
3.4.1. AWS CLI のインストール	54

3.4.2. S3 バケットの作成	55
3.4.3. vmimport ロールの作成	56
3.4.4. イメージの S3 への変換およびプッシュ	57
3.4.5. イメージのスナップショットとしてのインポート	58
3.4.6. アップロードしたスナップショットからの AMI の作成	59
3.4.7. AMI からのインスタンスの起動	60
3.4.8. Red Hat サブスクリプションの割り当て	61
3.4.9. AWS Gold Image での自動登録の設定	62
第4章 AWS での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定	63
4.1. AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーの作成	63
4.2. AWS CLI のインストール	64
4.3. HA EC2 インスタンスの作成	65
4.4. 秘密鍵の設定	66
4.5. インスタンスへの接続	66
4.6. 高可用性パッケージおよびエージェントのインストール	67
4.7. クラスターの作成	68
4.8. フェンシングの設定	69
4.9. クラスターノードへの AWS CLI のインストール	71
4.10. ネットワークリソースエージェントのインストール	72
4.11. 共有ブロックストレージの設定	75
第5章 GOOGLE CLOUD PLATFORM での GOOGLE COMPUTE ENGINE インスタンスとしての RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージのデプロイメント	78
5.1. GCP での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション	78
5.2. ベースイメージの理解	79
5.2.1. カスタムベースイメージの使用	80
5.2.2. 仮想マシン構成設定	80
5.3. ISO イメージからのベース仮想マシンの作成	80
5.3.1. ISO イメージのダウンロード	80
5.3.2. ISO イメージからの仮想マシンの作成	80
5.3.3. RHEL インストールの完了	81
5.4. RHEL イメージの GCP へのアップロード	82
5.4.1. GCP での新規プロジェクトの作成	82
5.4.2. Google Cloud SDK のインストール	82
5.4.3. Google Compute Engine の SSH 鍵の作成	83
5.4.4. GCP ストレージでのストレージバケットの作成	84
5.4.5. GCP バケットへのイメージの変換およびアップロード	84
5.4.6. GCP バケットのオブジェクトからイメージの作成	85
5.4.7. イメージからの Google Compute Engine インスタンスの作成	86
5.4.8. インスタンスへの接続	87
5.4.9. Red Hat サブスクリプションの割り当て	87
第6章 GOOGLE CLOUD PLATFORM での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定	89
6.1. 必要なシステムパッケージ	90
6.2. GCP での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション	90
6.3. GOOGLE CLOUD SDK のインストール	91
6.4. GCP イメージバケットの作成	92
6.5. カスタムの仮想プライベートクラウドネットワークおよびサブネットの作成	93
6.6. ベース GCP イメージの準備およびインポート	93
6.7. ベース GCP インスタンスの作成および設定	93
6.8. スナップショットイメージの作成	96
6.9. HA ノードテンプレートインスタンスおよび HA ノードの作成	97
6.10. HA パッケージおよびエージェントのインストール	97

6.11. HA サービスの設定	98
6.12. クラスターの作成	99
6.13. フェンスデバイスの作成	100
6.14. GCP ノードの承認の設定	101
6.15. GCP-VCP-MOVE-VIP リソースエージェントの設定	101

オープンソースをより包摂的に

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#)をご覧ください。

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

ご意見ご要望をお聞かせください。ドキュメントの改善点はございませんか。改善点を報告する場合は、以下のように行います。

- 特定の文章に簡単なコメントを記入する場合は、以下の手順を行います。
 1. ドキュメントの表示が **Multi-page HTML** 形式になっていて、ドキュメントの右上端に **Feedback** ボタンがあることを確認してください。
 2. マウスカーソルで、コメントを追加する部分を強調表示します。
 3. そのテキストの下に表示される **Add Feedback** ポップアップをクリックします。
 4. 表示される手順に従ってください。
- より詳細なフィードバックを行う場合は、Bugzilla のチケットを作成します。
 1. [Bugzilla](#) の Web サイトに移動します。
 2. Component で **Documentation** を選択します。
 3. **Description** フィールドに、ドキュメントの改善に関するご意見を記入してください。ドキュメントの該当部分へのリンクも記入してください。
 4. **Submit Bug** をクリックします。

第1章 MICROSOFT AZURE での仮想マシンとして RED HAT ENTERPRISE LINUX 8 イメージをデプロイ

Azure に Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 8 イメージをデプロイするオプションは複数あります。本章では、イメージを選択するオプションを説明し、ホストシステムおよび仮想マシンのシステム要件の一覧を紹介します。本章では、ISO イメージからカスタム VM を作成し、そのイメージを Azure にアップロードして、Azure 仮想インスタンスを起動する手順も説明します。



重要

ISO イメージからカスタム仮想マシンを作成することは可能ですが、Red Hat Image Builder 製品を使用して、特定のクラウドプロバイダーで使用するようカスタマイズされたイメージを作成することを推奨します。Image Builder を使用すると、Azure Disk Image (VHD 形式) を作成してアップロードできます。詳細は「[RHEL システムイメージのカスタマイズの作成](#)」を参照してください。

この章では、Azure のドキュメントを参照している箇所が多数あります。多くの手順に関する詳細は、参照している Azure ドキュメントを確認してください。



注記

Azure でセキュアに使用できる Red Hat [製品の一覧](#)は、「[Red Hat on Microsoft Azure](#)」を参照してください。

前提条件

- [Red Hat カスタマーポータル](#) のアカウントにサインアップします。
- [Microsoft Azure](#) アカウントにサインアップします。
- [Red Hat Cloud Access](#) プログラム でサブスクリプションを有効にします。Red Hat Cloud Access プログラムでは、Red Hat サブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートのある Azure へ移動できます。

関連情報

- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [Red Hat Cloud Access Reference Guide](#)
- [Frequently Asked Questions and Recommended Practices for Microsoft Azure](#)

1.1. AZURE での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション

以下の表には、イメージの選択肢を記載し、イメージオプションの相違点を示しています。

表1.1 イメージオプション

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
-----------	-----------	----------	------

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
Red Hat Gold Image のデプロイを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラムを使用してサブスクリプションを有効にし、Azure で Red Hat Gold Image を選択します。Gold イメージおよび Azure でイメージにアクセスする方法は、『Red Hat Cloud Access Reference Guide』を参照してください。	<p>このサブスクリプションには、Red Hat のコストが含まれていますが、他のインスタンスのコストは、Microsoft 社に支払うこととなります。</p> <p>Red Hat Gold Image は、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。</p>
Azure に移動するカスタムイメージをデプロイすることを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラムを使用してサブスクリプションを有効にし、カスタムイメージをアップロードし、サブスクリプションを割り当てます。	<p>その他のすべてのインスタンスコストを Microsoft 社に支払うこととなりますが、サブスクリプションには Red Hat 製品コストが含まれます。</p> <p>Azure に移行するカスタムイメージは、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。</p>
RHEL を含む既存の Azure イメージをデプロイすることを選択する	Azure イメージには、Red Hat 製品が含まれる	Azure コンソールを使用して仮想マシンを作成する際に RHEL イメージを選択するか、Azure Marketplace から仮想マシンを選択します。	<p>従量課金モデルで1時間ごとに Microsoft 社に支払います。このようなイメージは「オンデマンド」と呼ばれています。Azure は、サポート契約に基づいてオンデマンドイメージのサポートを提供します。</p> <p>Red Hat は、イメージの更新を提供します。Azure により、Red Hat Update Infrastructure (RHUI) から更新を利用できるようにします。</p>



注記

Red Hat Image Builder を使用して、Azure 用のカスタムイメージを作成できます。詳細は「[RHEL システムイメージのカスタマイズの作成](#)」を参照してください。

本章の残りの部分には、Red Hat Enterprise Linux カスタムイメージに関連する情報および手順が記載されています。

関連情報

- [Red Hat Gold Images on Microsoft Azure](#)
- [Red Hat Cloud Access プログラム](#)
- [Azure Marketplace](#)
- [Billing options in the Azure Marketplace](#)
- [Red Hat Enterprise Linux Bring-Your-Own-Subscription Gold Images in Azure](#)

1.2. ベースイメージの理解

本セクションでは、事前設定されたベースイメージおよびその設定を使用する方法を説明します。

1.2.1. カスタムベースイメージの使用

仮想マシンを手動で設定するには、ベース (スタートアップ) 仮想マシンイメージで開始します。ベース仮想マシンイメージを作成したら、構成設定を変更して、仮想マシンがクラウドで動作するために必要なパッケージを追加できます。イメージのアップロード後に、特定のアプリケーションに追加の設定変更を行うことができます。

RHEL のクラウドイメージを準備するには、以下の手順に従います。RHEL の Hyper-V [クラウドイメージを準備するには](#)、「[Hyper-V Manager から Red Hat ベースの仮想マシンの準備](#)」を参照してください。

関連情報

[Red Hat Enterprise Linux](#)

1.2.2. 必要なシステムパッケージ

本章の手順では、Red Hat Enterprise Linux を実行しているホストシステムを使用していることを前提としています。この手順を正常に行うには、ホストシステムに以下のパッケージをインストールする必要があります。

表1.2 システムパッケージ

パッケージ	リポジトリ	説明
libvirt	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	プラットフォーム仮想化を管理するためのオープンソース API、デーモン、および管理ツール

パッケージ	リポジトリ	説明
virt-install	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンを構築するためのコマンドラインユーティリティー
libguestfs	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンファイルシステムにアクセスして変更するためのライブラリー
libguestfs-tools	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシン用のシステム管理ツール (guestfish ユーティリティーを含む)

1.2.3. Azure VM 設定

Azure 仮想マシンには、以下の構成設定が必要です。設定の一部は、最初の仮想マシン作成時に有効になります。Azure 用の仮想マシンイメージのプロビジョニング時に、その他の設定が設定されます。この手順を進める際には、この設定に留意してください。必要に応じてそれらを参照します。

表1.3 仮想マシンの構成設定

設定	推奨事項
ssh	Azure VM へのリモートアクセスを確立するには、SSH を有効にする必要があります。
dhcp	プライマリー仮想アダプターは、dhcp (IPv4 のみ) 用に設定する必要があります。
swap 領域	専用 swap ファイルまたは swap パーティションは作成しないでください。Windows Azure Linux Agent (WALinuxAgent) を使用してスワップ領域を設定できます。
NIC	プライマリー仮想ネットワークアダプター用に virtio を選択します。
暗号化	カスタムイメージの場合には、Azure で完全なディスク暗号化に Network Bound Disk Encryption (NBDE) を使用します。

1.2.4. ISO イメージからのベースイメージの作成

以下の手順は、カスタム ISO イメージ作成の手順と初期設定の要件を示しています。イメージを設定したら、このイメージを、追加の仮想マシンインスタンスを作成するためのテンプレートとして使用できます。

手順

1. Red Hat カスタマーポータル から最新の Red Hat Enterprise Linux 8 DVD ISO イメージをダウンロードします。
2. 仮想化用のホストマシンを有効にしていることを確認します。設定および手順は、「RHEL 8 で仮想化を有効にする」を参照してください。
3. 基本的な Red Hat Enterprise Linux 仮想マシンを作成し、起動します。手順は、「仮想マシンの作成」を参照してください。
 - a. コマンドラインを使用して仮想マシンを作成する場合は、デフォルトのメモリーと CPU を仮想マシンの容量に設定するようにしてください。仮想ネットワークインターフェースを `virtio` に設定します。
基本的なコマンドラインの例を以下に示します。

```
virt-install --name isotest --memory 2048 --vcpus 2 --disk size=8,bus=virtio --location rhel-8.0-x86_64-dvd.iso --os-variant=rhel8.0
```
 - b. Web コンソールを使用して仮想マシンを作成する場合は、「Web コンソールで仮想マシンの作成」の手順を行います。以下の点に注意してください。
 - 仮想マシンをすぐに起動 は選択しないでください。
 - メモリー と ストレージのサイズ を、希望の設定に変更します。
 - インストールを開始する前に、仮想ネットワークインターフェース設定 で モデル を `virtio` に変更し、`vCPUs` を仮想マシンの容量設定に変更していることを確認します。
4. 以下の追加インストールの選択と変更を確認します。
 - 標準 RHEL オプションを使用して 最小インストール を選択します。
 - インストール先 で、カスタムストレージ設定 を選択します。以下の設定情報を使用して選択を行います。
 - `/boot` で、500 MB 以上であることを確認してください。
 - ファイルシステムの場合は、`boot` パーティションおよび `root` パーティションの両方に `xf`s、`ext4`、`ext3` のいずれかを使用します。
 - `swap` 領域を削除します。swap 領域は、`WALinuxAgent` により Azure 内の物理ブレードサーバー上で設定されます。
 - インストール概要 画面で、ネットワークおよびホスト名 を選択します。イーサネット を オン に切り替えます。
5. インストール開始時に、以下を行います。
 - `root` のパスワードを作成します。
 - 管理者ユーザーアカウントを作成します。
6. インストールが完了したら、仮想マシンを再起動して `root` アカウントにログインします。
7. `root` でログインしたら、イメージを設定できます。

1.3. MICROSOFT AZURE のベースイメージの設定

ベースイメージには、Azure で Red Hat Enterprise Linux 8 仮想マシンイメージとして機能するための設定変更が必要です。以下のセクションでは、Azure で必要な追加の設定変更を説明します。

1.3.1. Hyper-V デバイスドライバーのインストール

Microsoft は、Linux Integration Services (LIS) for Hyper-V パッケージの一部として、ネットワークおよびストレージデバイスのドライバーを提供しています。Hyper-V デバイスドライバーを Azure 仮想マシンとしてプロビジョニングする前に、仮想マシンイメージへのインストールが必要になる場合があります。**lsinitrd | grep hv** コマンドを使用して、ドライバーがインストールされていることを確認します。

手順

1. 以下の **grep** コマンドを実行して、必要な Hyper-V デバイスドライバーがインストールされているかどうかを確認します。

```
# lsinitrd | grep hv
```

以下の例では、必要なドライバーがすべてインストールされています。

```
# lsinitrd | grep hv
drwxr-xr-x 2 root root      0 Aug 12 14:21 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/hv
-rw-r--r-- 1 root root  31272 Aug 11 08:45 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/hv/hv_vmbus.ko.xz
-rw-r--r-- 1 root root  25132 Aug 11 08:46 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/net/hyperv/hv_netvsc.ko.xz
-rw-r--r-- 1 root root   9796 Aug 11 08:45 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/scsi/hv_storvsc.ko.xz
```

すべてのドライバーがインストールされていない場合は、残りの手順を完了してください。



注記

hv_vmbus ドライバーは、すでにこの環境に追加されている可能性があります。このドライバーが存在する場合でも、次の手順を実行してください。

2. **/etc/dracut.conf.d** に **hv.conf** という名前のファイルを作成します。
3. 以下のドライバーパラメーターを **dracut.conf** ファイルに追加します。

```
add_drivers+=" hv_vmbus "
add_drivers+=" hv_netvsc "
add_drivers+=" hv_storvsc "
```



注記

引用符の前後に空白に注意してください (例: **add_drivers+=" hv_VMBus "**)。これにより、環境内にその他の Hyper-V ドライバーが存在している場合に、一意のドライバーが読み込まれます。

4. **initramfs** イメージを再生成します。


```
# dracut -f -v --regenerate-all
```

検証手順

1. マシンを再起動します。
2. **lsinitrd | grep hv** コマンドを実行して、ドライバーがインストールされていることを確認します。

1.3.2. 追加の構成設定の変更

仮想マシンを Azure で動作するには、さらなる設定変更が必要です。追加の変更を行うには、以下の手順を行います。

手順

1. 必要な場合は、仮想マシンの電源を入れます。
2. 仮想マシンを登録し、Red Hat Enterprise Linux 8 リポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager register --auto-attach
```

cloud-init の停止および削除

1. **cloud-init** サービスが存在する場合は停止します。

```
# systemctl stop cloud-init
```

2. **cloud-init** ソフトウェアを削除します。

```
# yum remove cloud-init
```

その他の仮想マシン変更の完了

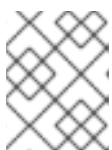
1. **/etc/ssh/sshd_config** ファイルを編集し、パスワード認証を有効にします。

```
PasswordAuthentication yes
```

2. 一般的なホスト名を設定してください。

```
# hostnamectl set-hostname localhost.localdomain
```

3. **/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0** ファイルを編集 (または作成) します。以下のパラメーターのみを使用してください。



注記

ifcfg-eth0 ファイルは、RHEL 8 DVD ISO イメージには存在しないため、作成する必要があります。

```
DEVICE="eth0"
```

```
ONBOOT="yes"
BOOTPROTO="dhcp"
TYPE="Ethernet"
USERCTL="yes"
PEERDNS="yes"
IPV6INIT="no"
```

4. すべての永続的なネットワークデバイスルールがある場合は削除します。

```
# rm -f /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
# rm -f /etc/udev/rules.d/75-persistent-net-generator.rules
# rm -f /etc/udev/rules.d/80-net-name-slot-rules
```

5. **ssh** が自動的に起動するように設定します。

```
# systemctl enable sshd
# systemctl is-enabled sshd
```

6. カーネルブートパラメーターを変更します。

- a. `/etc/default/grub` ファイルの **GRUB_CMDLINE_LINUX** 行の先頭に **crashkernel=256M** を追加します。 **crashkernel=auto** が存在する場合は、 **crashkernel=256M** に変更します。
- b. 次の行がない場合は、 **GRUB_CMDLINE_LINUX** 行の末尾に追加します。

```
earlyprintk=ttyS0
console=ttyS0
rootdelay=300
```

- c. 以下のオプションが存在する場合は削除します。

```
rhgb
quiet
```

7. **grub.cfg** ファイルを再生成します。

```
# grub2-mkconfig -o /boot/grub2/grub.cfg
```

8. Windows Azure Linux Agent (WALinuxAgent) のインストールと有効化WALinuxAgent は、Red Hat Enterprise Linux 8 Application Stream (AppStream) に含まれています。 [詳細は「AppStream の使用」](#) を参照してください。

```
# yum install WALinuxAgent -y
# systemctl enable waagent
```

9. `/etc/waagent.conf` で以下の行を編集して、プロビジョニングされた仮想マシン用にスワップ領域を設定します。プロビジョニングされた仮想マシンに適した swap 領域を設定します。

```
Provisioning.DeleteRootPassword=n
ResourceDisk.Filesystem=ext4
ResourceDisk.EnableSwap=y
ResourceDisk.SwapSizeMB=2048
```

プロビジョニングの準備

1. Red Hat Subscription Manager から仮想マシンの登録を解除します。

```
# subscription-manager unregister
```

2. 既存のプロビジョニングの詳細をクリーンアップして、Azure プロビジョニング用に仮想マシンを準備します。Azure は、仮想マシンを Azure に再プロビジョニングします。このコマンドは、警告を生成しますが、これは正常です。

```
# waagent -force -deprovision
```

3. シェル履歴をクリーンアップし、仮想マシンをシャットダウンします。

```
# export HISTSIZE=0
# poweroff
```

1.4. イメージの固定 VHD 形式への変換

すべての Microsoft Azure 仮想マシンイメージは、固定 **VHD** 形式である必要があります。イメージは、VHD に変換する前に 1MB の境界で調整する必要があります。このセクションでは、必要に応じて、イメージを、**qcow2** 形式から固定の **VHD** 形式に変換して配置する方法を説明します。イメージを変換したら、Azure にアップロードできます。

手順

1. イメージを **qcow2** 形式から **raw** 形式に変換します。

```
$ qemu-img convert -f qcow2 -O raw <image-name>.qcow2 <image-name>.raw
```

2. 以下のコンテンツを使用してシェルスクリプトを作成します。

```
#!/bin/bash
MB=$((1024 * 1024))
size=$(qemu-img info -f raw --output json "$1" | gawk 'match($0, /"virtual-size": ([0-9]+)/, val)
{print val[1]}')
rounded_size=$((($size/$MB + 1) * $MB))
if [ $($size % $MB) -eq 0 ]
then
  echo "Your image is already aligned. You do not need to resize."
  exit 1
fi
echo "rounded size = $rounded_size"
export rounded_size
```

3. スクリプトを実行します。この例では **align.sh** という名前を使用します。

```
$ sh align.sh <image-xxx>.raw
```

- 「Your image is already aligned. You do not need to resize. (イメージはすでに整列しています。サイズを変更する必要はありません。)」と表示されたら、次の手順に進みます。
- 値が表示されると、イメージは調整されません。

4. 次のコマンドを使用して、ファイルを固定 **VHD** 形式に変換します。
サンプルでは **qemu-img** バージョン 2.12.0 を使用します。

```
$ qemu-img convert -f raw -o subformat=fixed,force_size -O vpc <image-xxx>.raw  
<image.xxx>.vhd
```

変換されると、**VHD** ファイルは Azure にアップロードする準備が整います。

イメージのアライメント

以下の手順は、**raw** ファイルの整列が行われていない場合にのみ行います。

1. 検証スクリプトの実行時に表示される丸め値を使用して、**raw** ファイルのサイズを変更します。

```
$ qemu-img resize -f raw <image-xxx>.raw <rounded-value>
```

2. **raw** イメージファイルを **VHD** 形式に変換します。
サンプルでは **qemu-img** バージョン 2.12.0 を使用します。

```
$ qemu-img convert -f raw -o subformat=fixed,force_size -O vpc <image-xxx>.raw  
<image.xxx>.vhd
```

変換されると、**VHD** ファイルは Azure にアップロードする準備が整います。

1.5. AZURE CLI のインストール

Azure コマンドラインインターフェース (Azure CLI 2.1) をインストールするには、以下の手順を実行します。Azure CLI 2.1 は、Azure で仮想マシンを作成し、管理する Python ベースのユーティリティです。

前提条件

- Azure CLI を使用するための [Microsoft Azure](#) のアカウントがある。
- Azure CLI をインストールするために Python 3.x がインストールされている。

手順

1. Microsoft リポジトリキーをインポートします。

```
$ sudo rpm --import https://packages.microsoft.com/keys/microsoft.asc
```

2. ローカル Azure CLI リポジトリエントリを作成します。

```
$ sudo sh -c 'echo -e "[azure-cli]\nname=Azure\nCLInbaseurl=https://packages.microsoft.com/yumrepos/azure-  
cli\nenabled=1\nngpgcheck=1\nngpgkey=https://packages.microsoft.com/keys/microsoft.asc" >  
<pre> /etc/yum.repos.d/azure-cli.repo'
```

3. **yum** パッケージインデックスを更新します。

```
$ yum check-update
```

- Python バージョンを確認 (`python --version`) し、必要に応じて Python 3.x をインストールします。

```
$ sudo yum install python3
```

- Azure CLI をインストールします。

```
$ sudo yum install -y azure-cli
```

- Azure CLI を実行します。

```
$ az
```

関連情報

- [Azure CLI](#)
- [Azure CLI コマンドリファレンス](#)

1.6. AZURE でのリソースの作成

VHD ファイルをアップロードして Azure イメージを作成する前に、以下の手順に従って、必要な Azure リソースを作成します。

手順

- 次のコマンドを実行して、システムを Azure で認証し、ログインします。

```
$ az login
```



注記

お使いの環境でブラウザが利用可能な場合、CLI は Azure サインインページでブラウザを開きます。詳細およびオプションは、「[Sign in with Azure CLI](#)」を参照してください。

- Azure リージョンにリソースグループを作成します。

```
$ az group create --name <resource-group> --location <azure-region>
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az group create --name azrhelclirgrp --location southcentralus
{
  "id": "/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp",
  "location": "southcentralus",
  "managedBy": null,
  "name": "azrhelclirgrp",
  "properties": {
    "provisioningState": "Succeeded"
  }
}
```

```

    },
    "tags": null
  }

```

3. ストレージアカウントを作成します。有効な [SKU 値の詳細は、SKU Types](#) を参照してください。

```

$ az storage account create -l <azure-region> -n <storage-account-name> -g <resource-group> --sku <sku_type>

```

たとえば、以下ようになります。

```

[clouduser@localhost]$ az storage account create -l southcentralus -n azrhelclistact -g azrhelclirgrp --sku Standard_LRS
{
  "accessTier": null,
  "creationTime": "2017-04-05T19:10:29.855470+00:00",
  "customDomain": null,
  "encryption": null,
  "id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Storage/storageAccounts/azrhelclistact",
  "kind": "StorageV2",
  "lastGeoFailoverTime": null,
  "location": "southcentralus",
  "name": "azrhelclistact",
  "primaryEndpoints": {
    "blob": "https://azrhelclistact.blob.core.windows.net/",
    "file": "https://azrhelclistact.file.core.windows.net/",
    "queue": "https://azrhelclistact.queue.core.windows.net/",
    "table": "https://azrhelclistact.table.core.windows.net/"
  },
  "primaryLocation": "southcentralus",
  "provisioningState": "Succeeded",
  "resourceGroup": "azrhelclirgrp",
  "secondaryEndpoints": null,
  "secondaryLocation": null,
  "sku": {
    "name": "Standard_LRS",
    "tier": "Standard"
  },
  "statusOfPrimary": "available",
  "statusOfSecondary": null,
  "tags": {},
  "type": "Microsoft.Storage/storageAccounts"
}

```

4. ストレージアカウントの接続文字列を取得します。

```

$ az storage account show-connection-string -n <storage-account-name> -g <resource-group>

```

たとえば、以下ようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage account show-connection-string -n azrhelcllistact -g
azrhelclirsgrp
{
  "connectionString":
  "DefaultEndpointsProtocol=https;EndpointSuffix=core.windows.net;AccountName=azrhelcllistact
  AccountKey=NreGk...=="
}
```

5. 接続文字列をコピーし、次のコマンドに貼り付けて、接続文字列をエクスポートします。この文字列は、システムをストレージアカウントに接続します。

```
$ export AZURE_STORAGE_CONNECTION_STRING="<storage-connection-string>"
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ export
AZURE_STORAGE_CONNECTION_STRING="DefaultEndpointsProtocol=https;EndpointSuffi
x=core.windows.net;AccountName=azrhelcllistact;AccountKey=NreGk...=="
```

6. ストレージコンテナを作成します。

```
$ az storage container create -n <container-name>
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage container create -n azrhelcllistcont
{
  "created": true
}
```

7. 仮想ネットワークを作成します。

```
$ az network vnet create -g <resource group> --name <vnet-name> --subnet-name <subnet-
name>
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az network vnet create --resource-group azrhelclirsgrp --name
azrhelclivnet1 --subnet-name azrhelclisubnet1
{
  "newVNet": {
    "addressSpace": {
      "addressPrefixes": [
        "10.0.0.0/16"
      ]
    },
    "dhcpOptions": {
      "dnsServers": []
    },
    "etag": "W/\\""",
    "id":
    "/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirsgrp/providers/Microsoft.Network/virtualNetworks/azr
    helclivnet1",
```

```

"location": "southcentralus",
"name": "azrhelclivnet1",
"provisioningState": "Succeeded",
"resourceGroup": "azrhelclirgrp",
"resourceGuid": "0f25efee-e2a6-4abe-a4e9-817061ee1e79",
"subnets": [
  {
    "addressPrefix": "10.0.0.0/24",
    "etag": "W/\\"",
    "id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Network/virtualNetworks/azrhelclivnet1/subnets/azrhelclisubnet1",
    "ipConfigurations": null,
    "name": "azrhelclisubnet1",
    "networkSecurityGroup": null,
    "provisioningState": "Succeeded",
    "resourceGroup": "azrhelclirgrp",
    "resourceNavigationLinks": null,
    "routeTable": null
  }
],
"tags": {},
"type": "Microsoft.Network/virtualNetworks",
"virtualNetworkPeerings": null
}
}

```

関連情報

- [Azure Managed Disks Overview](#)
- [SKU Types](#)

1.7. AZURE イメージのアップロードおよび作成

以下の手順に従って、**VHD** ファイルをコンテナにアップロードし、Azure カスタムイメージを作成します。



注記

システムを再起動すると、エクスポートしたストレージ接続文字列は維持されません。以下の手順でいずれかのコマンドが失敗した場合は、再び接続文字列をエクスポートしてください。

手順

1. ストレージコンテナに **VHD** ファイルをアップロードします。これには数分かかる場合があります。ストレージコンテナの一覧を表示するには、**az storage container list** を実行します。

```
$ az storage blob upload --account-name <storage-account-name> --container-name
<container-name> --type page --file <path-to-vhd> --name <image-name>.vhd
```

たとえば、以下ようになります。


```
[clouduser@localhost]$ az storage blob upload --account-name azrhelclistact --container-name azrhelclistcont --type page --file rhel-image-8.vhd --name rhel-image-8.vhd
Percent complete: %100.0
```

- アップロードした **VHD** ファイルの URL を以下の手順で取得します。

```
$ az storage blob url -c <container-name> -n <image-name>.vhd
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage blob url -c azrhelclistcont -n rhel-image-8.vhd
"https://azrhelclistact.blob.core.windows.net/azrhelclistcont/rhel-image-8.vhd"
```

- Azure カスタムイメージを作成します。

```
$ az image create -n <image-name> -g <resource-group> -l <azure-region> --source <URL>
--os-type linux
```



注記

仮想マシンのハイパーバイザーのデフォルトの生成は V1 です。必要に応じて、**-hyper-v-generation V2** オプションを使用して V2 ハイパーバイザーの世代を指定できます。第 2 世代の仮想マシンは、UEFI ベースのブートアーキテクチャーを使用します。[第 2 世代の仮想マシンの詳細は、「Support for generation 2 VMs on Azure」を参照してください。](#)

このコマンドは、「Only blobs formatted as VHDs can be imported」(VHD としてフォーマットされたブロブのみがインポート可能) というエラーを返す場合があります。このエラーは、イメージが **VHD** に変換される前に最も近い 1 MB の境界に合致していないことを意味します。

たとえば、以下のようになります。

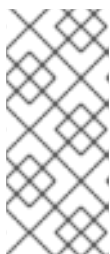
```
[clouduser@localhost]$ az image create -n rhel8 -g azrhelclirsgpr2 -l southcentralus --source https://azrhelclistact.blob.core.windows.net/azrhelclistcont/rhel-image-8.vhd --os-type linux
```

1.8. AZURE での仮想マシンの作成および起動

以下の手順では、イメージから管理ディスクの Azure 仮想マシンを作成するための最小限のコマンドオプションを説明します。[追加オプションは、「az vm create」を参照してください。](#)

手順

- 次のコマンドを実行して仮想マシンを作成します。



注記

--generate-ssh-keys オプションを指定すると、秘密鍵と公開鍵のペアが作成されます。秘密鍵ファイルと公開鍵ファイルが、システムの `~/.ssh` に作成されます。公開鍵は、**--admin-username** オプションで指定したユーザーの仮想マシン上の `authorized_keys` ファイルに追加されます。[詳細は、「その他の認証方法」を参照してください。](#)

```
$ az vm create -g <resource-group> -l <azure-region> -n <vm-name> --vnet-name <vnet-name> --subnet <subnet-name> --size Standard_A2 --os-disk-name <simple-name> --admin-username <administrator-name> --generate-ssh-keys --image <path-to-image>
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az vm create -g azrhelclirgrp2 -l southcentralus -n rhel-azure-vm-1 --vnet-name azrhelclivnet1 --subnet azrhelclisubnet1 --size Standard_A2 --os-disk-name vm-1-osdisk --admin-username clouduser --generate-ssh-keys --image rhel8

{
  "fqdns": "",
  "id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Compute/virtualMachines/rhel-azure-vm-1",
  "location": "southcentralus",
  "macAddress": "",
  "powerState": "VM running",
  "privateIpAddress": "10.0.0.4",
  "publicIpAddress": "<public-IP-address>",
  "resourceGroup": "azrhelclirgrp2"
```

publicIpAddress を書き留めます。以下の手順で仮想マシンにログインするには、このアドレスが必要です。

- SSH セッションを開始し、仮想マシンにログインします。

```
[clouduser@localhost]$ ssh -i /home/clouduser/.ssh/id_rsa clouduser@<public-IP-address>.
The authenticity of host '<public-IP-address>' can't be established.
Are you sure you want to continue connecting (yes/no)? yes
Warning: Permanently added '<public-IP-address>' (ECDSA) to the list of known hosts.

[clouduser@rhel-azure-vm-1 ~]$
```

ユーザープロンプトが表示された場合は、Azure VM が正常にデプロイされます。

これで、Microsoft Azure ポータルにアクセスして、リソースの監査ログとプロパティを確認できます。このポータルでは、仮想マシンを直接管理できます。複数の仮想マシンを管理している場合は、Azure CLI を使用する必要があります。Azure CLI では、Azure 内のリソースに強力なインターフェースを利用できます。Microsoft [Azure で仮想マシンを管理するために使用するコマンドの詳細](#)は、CLI で **az --help** を実行するか、「[Azure CLI コマンドリファレンス](#)」を参照してください。

1.9. その他認証方法

セキュリティを強化するために推奨されますが、Azure 生成のキーペアを使用する必要はありません。以下の例は、SSH 認証用の 2 つの方法を示しています。

例1: 次のコマンドオプションは、公開鍵ファイルを生成せずに新しい仮想マシンをプロビジョニングします。これにより、SSH は、パスワードを使用した SSH 認証を許可できます。

```
$ az vm create -g <resource-group> -l <azure-region> -n <vm-name> --vnet-name <vnet-name> --subnet <subnet-name> --size Standard_A2 --os-disk-name <simple-name> --authentication-type password --admin-username <administrator-name> --admin-password <ssh-password> --image <path-to-image>
```

```
$ ssh <admin-username>@<public-ip-address>
```

例2: このコマンドオプションにより、新しい Azure 仮想マシンがプロビジョニングされ、既存の公開鍵ファイルを使用した SSH 認証が許可されます。

```
$ az vm create -g <resource-group> -l <azure-region> -n <vm-name> --vnet-name <vnet-name> --subnet <subnet-name> --size Standard_A2 --os-disk-name <simple-name> --admin-username <administrator-name> --ssh-key-value <path-to-existing-ssh-key> --image <path-to-image>
```

```
$ ssh -i <path-to-existing-ssh-key> <admin-username>@<public-ip-address>
```

1.10. RED HAT サブスクリプションの割り当て

Red Hat Cloud Access プログラムで有効になっているサブスクリプションを割り当てるには、以下の手順を行います。

前提条件

サブスクリプションが有効になっている。

手順

1. システムを登録します。

```
subscription-manager register --auto-attach
```

2. サブスクリプションを割り当てます。

- アクティベーションキーを使用して、サブスクリプションを割り当てることができます。詳細は、「[カスタマーポータルでのアクティベーションキーを作成する](#)」を参照してください。
- または、サブスクリプションプール (Pool ID) の ID を使用してサブスクリプションを手動で割り当てることができます。「[コマンドラインでのサブスクリプションのアタッチと削除](#)」を参照してください。

関連情報

- [カスタマーポータルでのアクティベーションキーを作成する](#)
- [コマンドラインでのサブスクリプションのアタッチと削除](#)
- [Red Hat Subscription Manager の使用および設定](#)

1.11. AZURE GOLD IMAGE での自動登録の設定

Micorsoft Azure での RHEL 8 仮想マシン (VM) を高速でより速くするために、RHEL 8 の Gold Images を Red Hat Subscription Manager (RHSM) に自動的に登録するように設定できます。

前提条件

- Azure で Cloud Access の対象となる Red Hat 製品サブスクリプションを有効にしており、RHEL 8 Gold Image は Microsoft Azure で利用可能になります。手順は、「[Azure での Gold Image の使用](#)」を参照してください。



注記

Microsoft Azure アカウントは一度に1つの Red Hat アカウントにのみ割り当てることができます。したがって、Red Hat に割り当てる前に、他のユーザーが Azure アカウントへのアクセスを必要としないことを確認します。

Procedure

1. Gold Image を使用して、Azure インスタンスに RHEL 8 仮想マシンを作成します。手順については、「[Azure での仮想マシンの作成および起動](#)」を参照してください。
2. 作成した仮想マシンを起動します。
3. RHEL 8 仮想マシンで、自動登録を有効にします。

```
# subscription-manager config --rhsmcertd.auto_registration=1
```

4. **rhsmcertd** サービスを有効にします。

```
# systemctl enable rhsmcertd.service
```

5. **redhat.repo** リポジトリを無効にします。

```
# subscription-manager config --rhsm.manage_repos=0
```

6. 仮想マシンの電源をオフにし、Azure で管理イメージとして保存します。手順は、「[How to create a managed image of a virtual machine or VHD](#)」を参照してください。
7. 管理イメージを使用して仮想マシンを作成します。RHSM に自動的にサブスクリプションされます。

検証

- 上記の手順に従って作成された RHEL 8 仮想マシンで、**subscription-manager identity** コマンドを実行して、システムが RHSM に登録されていることを確認します。正常に登録されたシステムでは、システムの UUID が表示されます。以下に例を示します。

```
# subscription-manager identity
system identity: fdc46662-c536-43fb-a18a-bbcb283102b7
name: 192.168.122.222
org name: 6340056
org ID: 6340056
```

関連情報

- [Azure での Red Hat Gold Image](#)
- [Azure での RHEL イメージの概要](#)
- [Red Hat サービスのクラウドソースの設定](#)

第2章 MICROSOFT AZURE での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定

本章では、Azure 仮想マシンインスタンスをクラスターノードとして使用して Azure に Red Hat High Availability (HA) クラスターを設定するための情報および手順を説明します。本章の手順では、Azure 用のカスタムイメージを作成していることを前提としています。クラスターに使用する RHEL 8 イメージを取得するオプションは複数あります。Azure のイメージオプションに関する詳細は、「[Azure における Red Hat Enterprise Linux Image オプション](#)」を参照してください。

本章では、Azure の環境設定の前提条件を説明します。環境を設定したら、Azure 仮想マシンインスタンスを作成および設定できます。

本章では、個別のノードを Azure の HA ノードのクラスターに変換する HA クラスターの作成に固有の手順も説明します。これには、各クラスターノードに高可用性パッケージおよびエージェントをインストールし、フェンシングを設定し、Azure ネットワークリソースエージェントをインストールする手順が含まれます。

この章では、Azure のドキュメントを参照している箇所が多数あります。多くの手順に関する詳細は、参照している Azure ドキュメントを確認してください。

前提条件

- [Red Hat カスタマーポータル](#) のアカウントにサインアップします。
- 管理者権限で [Microsoft Azure アカウント](#) にサインアップします。
- Azure コマンドラインインターフェース (CLI) をインストールする必要があります。詳細は、「[Azure CLI のインストール](#)」を参照してください。
- [Red Hat Cloud Access プログラム](#) でサブスクリプションを有効にします。Red Hat Cloud Access プログラムでは、Red Hat サブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートのある Azure へ移動できます。

関連情報

- [Support Policies for RHEL High Availability Clusters - Microsoft Azure Virtual Machines as Cluster Members](#)
- [高可用性クラスターの設定および管理](#)

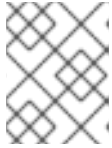
2.1. AZURE でのリソースの作成

リージョン、リソースグループ、ストレージアカウント、仮想ネットワーク、および可用性セットを作成するには、以下の手順を実施します。本章の後続のタスクを完了するには、これらのリソースが必要です。

手順

1. Azure でシステムを認証し、ログインします。

```
$ az login
```



注記

お使いの環境でブラウザーが利用可能な場合、CLI は Azure サインインページでブラウザーを開きます。

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az login
To sign in, use a web browser to open the page https://aka.ms/devicelogin and enter the code
FDMSCMETZ to authenticate.
[
  {
    "cloudName": "AzureCloud",
    "id": "Subscription ID",
    "isDefault": true,
    "name": "MySubscriptionName",
    "state": "Enabled",
    "tenantId": "Tenant ID",
    "user": {
      "name": "clouduser@company.com",
      "type": "user"
    }
  }
]
```

2. Azure リージョンにリソースグループを作成します。

```
$ az group create --name resource-group --location azure-region
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az group create --name azrhelclirgrp --location southcentralus
{
  "id": "/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp",
  "location": "southcentralus",
  "managedBy": null,
  "name": "azrhelclirgrp",
  "properties": {
    "provisioningState": "Succeeded"
  },
  "tags": null
}
```

3. ストレージアカウントを作成します。

```
$ az storage account create -l azure-region -n storage-account-name -g resource-group -
-sku sku_type --kind StorageV2
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage account create -l southcentralus -n azrhelclistact -g
azrhelclirgrp --sku Standard_LRS --kind StorageV2
{
  "accessTier": null,
```

```

"creationTime": "2017-04-05T19:10:29.855470+00:00",
"customDomain": null,
"encryption": null,
"id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Storage/storageAccounts/azr
helclistact",
"kind": "StorageV2",
"lastGeoFailoverTime": null,
"location": "southcentralus",
"name": "azrhelclistact",
"primaryEndpoints": {
  "blob": "https://azrhelclistact.blob.core.windows.net/",
  "file": "https://azrhelclistact.file.core.windows.net/",
  "queue": "https://azrhelclistact.queue.core.windows.net/",
  "table": "https://azrhelclistact.table.core.windows.net/"
},
"primaryLocation": "southcentralus",
"provisioningState": "Succeeded",
"resourceGroup": "azrhelclirgrp",
"secondaryEndpoints": null,
"secondaryLocation": null,
"sku": {
  "name": "Standard_LRS",
  "tier": "Standard"
},
"statusOfPrimary": "available",
"statusOfSecondary": null,
"tags": {},
"type": "Microsoft.Storage/storageAccounts"
}

```

4. ストレージアカウントの接続文字列を取得します。

```
$ az storage account show-connection-string -n storage-account-name -g resource-group
```

たとえば、以下のようになります。

```

[clouduser@localhost]$ az storage account show-connection-string -n azrhelclistact -g
azrhelclirgrp
{
  "connectionString":
  "DefaultEndpointsProtocol=https;EndpointSuffix=core.windows.net;AccountName=azrhelclistact
AccountKey=NreGk...=="
}

```

5. 接続文字列をコピーし、次のコマンドに貼り付けて、接続文字列をエクスポートします。この文字列は、システムをストレージアカウントに接続します。

```
$ export AZURE_STORAGE_CONNECTION_STRING="storage-connection-string"
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ export
AZURE_STORAGE_CONNECTION_STRING="DefaultEndpointsProtocol=https;EndpointSuffix=core.windows.net;AccountName=azrhelclistact;AccountKey=NreGk...=="
```

- ストレージコンテナを作成します。

```
$ az storage container create -n container-name
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage container create -n azrhelclistcont
{
  "created": true
}
```

- 仮想ネットワークを作成します。すべてのクラスターノードが同じ仮想ネットワークにある必要があります。

```
$ az network vnet create -g resource group --name vnet-name --subnet-name subnet-name
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az network vnet create --resource-group azrhelclirgrp --name
azrhelclivnet1 --subnet-name azrhelclisubnet1
{
  "newVNet": {
    "addressSpace": {
      "addressPrefixes": [
        "10.0.0.0/16"
      ]
    },
    "dhcpOptions": {
      "dnsServers": []
    },
    "etag": "W/\\""",
    "id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Network/virtualNetworks/azr
helclivnet1",
    "location": "southcentralus",
    "name": "azrhelclivnet1",
    "provisioningState": "Succeeded",
    "resourceGroup": "azrhelclirgrp",
    "resourceGuid": "0f25efee-e2a6-4abe-a4e9-817061ee1e79",
    "subnets": [
      {
        "addressPrefix": "10.0.0.0/24",
        "etag": "W/\\""",
        "id":
"/subscriptions//resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Network/virtualNetworks/azr
helclivnet1/subnets/azrhelclisubnet1",
        "ipConfigurations": null,
        "name": "azrhelclisubnet1",
        "networkSecurityGroup": null,
```



```

    "provisioningState": "Succeeded",
    "resourceGroup": "azrhelclirgrp",
    "resourceNavigationLinks": null,
    "routeTable": null
  }
],
"tags": {},
"type": "Microsoft.Network/virtualNetworks",
"virtualNetworkPeerings": null
}
}

```

8. 可用性セットを作成します。すべてのクラスターノードは同じ可用性セットにある必要があります。

```
$ az vm availability-set create --name MyAvailabilitySet --resource-group MyResourceGroup
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az vm availability-set create --name rhelha-avset1 --resource-group azrhelclirgrp
{
  "additionalProperties": {},
  "id":
"/subscriptions/.../resourceGroups/azrhelclirgrp/providers/Microsoft.Compute/availabilitySets/rhelha-avset1",
  "location": "southcentralus",
  "name": "rhelha-avset1",
  "platformFaultDomainCount": 2,
  "platformUpdateDomainCount": 5,
  ...omitted
}

```

関連情報

- [Sign in with Azure CLI](#)
- [SKU Types](#)
- [Azure Managed Disks Overview](#)

2.2. 高可用性に必要なシステムパッケージ

この手順では、Red Hat Enterprise Linux を使用して Azure HA 用の仮想マシンイメージを作成していることを前提としています。この手順を正常に行うには、以下のパッケージをインストールする必要があります。

表2.1 システムパッケージ

パッケージ	リポジトリ	説明
-------	-------	----

パッケージ	リポジトリ	説明
libvirt	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	プラットフォーム仮想化を管理するためのオープンソース API、デーモン、および管理ツール
virt-install	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンを構築するためのコマンドラインユーティリティ
libguestfs	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンファイルシステムにアクセスして変更するためのライブラリー
libguestfs-tools	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシン用のシステム管理ツール (guestfish ユーティリティを含む)

2.3. AZURE VM 設定

Azure 仮想マシンには、以下の構成設定が必要です。設定の一部は、最初の仮想マシン作成時に有効になります。Azure 用の仮想マシンイメージのプロビジョニング時に、その他の設定が設定されます。この手順を進める際には、この設定に留意してください。必要に応じてそれらを参照します。

表2.2 仮想マシンの構成設定

設定	推奨事項
ssh	Azure VM へのリモートアクセスを確立するには、SSH を有効にする必要があります。
dhcp	プライマリ仮想アダプターは、dhcp (IPv4 のみ) 用に設定する必要があります。
swap 領域	専用 swap ファイルまたは swap パーティションは作成しないでください。Windows Azure Linux Agent (WALinuxAgent) を使用してスワップ領域を設定できます。
NIC	プライマリ仮想ネットワークアダプター用に virtio を選択します。
暗号化	カスタムイメージの場合には、Azure で完全なディスク暗号化に Network Bound Disk Encryption (NBDE) を使用します。

2.4. HYPER-V デバイスドライバーのインストール

Microsoft は、Linux Integration Services (LIS) for Hyper-V パッケージの一部として、ネットワークおよびストレージデバイスのドライバーを提供しています。Hyper-V デバイスドライバーを Azure 仮想マシンとしてプロビジョニングする前に、仮想マシンイメージへのインストールが必要になる場合があります。**lsinitrd | grep hv** コマンドを使用して、ドライバーがインストールされていることを確認します。

手順

1. 以下の **grep** コマンドを実行して、必要な Hyper-V デバイスドライバーがインストールされているかどうかを確認します。

```
# lsinitrd | grep hv
```

以下の例では、必要なドライバーがすべてインストールされています。

```
# lsinitrd | grep hv
drwxr-xr-x 2 root root      0 Aug 12 14:21 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/hv
-rw-r--r-- 1 root root    31272 Aug 11 08:45 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/hv/hv_vmbus.ko.xz
-rw-r--r-- 1 root root    25132 Aug 11 08:46 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/net/hyperv/hv_netvsc.ko.xz
-rw-r--r-- 1 root root     9796 Aug 11 08:45 usr/lib/modules/3.10.0-932.el7.x86_64/kernel/drivers/scsi/hv_storvsc.ko.xz
```

すべてのドライバーがインストールされていない場合は、残りの手順を完了してください。

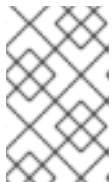


注記

hv_vmbus ドライバーは、すでにこの環境に追加されている可能性があります。このドライバーが存在する場合でも、次の手順を実行してください。

2. **/etc/dracut.conf.d** に **hv.conf** という名前のファイルを作成します。
3. 以下のドライバーパラメーターを **dracut.conf** ファイルに追加します。

```
add_drivers+=" hv_vmbus "
add_drivers+=" hv_netvsc "
add_drivers+=" hv_storvsc "
```



注記

引用符の前後に空白に注意してください (例: **add_drivers+=" hv_VMBus "**)。これにより、環境内にその他の Hyper-V ドライバーが存在している場合に、一意のドライバーが読み込まれます。

4. **initramfs** イメージを再生成します。

```
# dracut -f -v --regenerate-all
```

検証手順

1. マシンを再起動します。
2. **lsinitrd | grep hv** コマンドを実行して、ドライバーがインストールされていることを確認します。

2.5. 追加の構成設定の変更

仮想マシンを Azure で動作するには、さらなる設定変更が必要です。追加の変更を行うには、以下の手順を行います。

手順

1. 必要な場合は、仮想マシンの電源を入れます。
2. 仮想マシンを登録し、Red Hat Enterprise Linux 8 リポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager register --auto-attach
```

cloud-init の停止および削除

1. **cloud-init** サービスが存在する場合は停止します。

```
# systemctl stop cloud-init
```

2. **cloud-init** ソフトウェアを削除します。

```
# yum remove cloud-init
```

その他の仮想マシン変更の完了

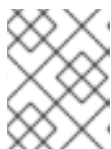
1. **/etc/ssh/sshd_config** ファイルを編集し、パスワード認証を有効にします。

```
PasswordAuthentication yes
```

2. 一般的なホスト名を設定してください。

```
# hostnamectl set-hostname localhost.localdomain
```

3. **/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0** ファイルを編集 (または作成) します。以下のパラメーターのみを使用してください。



注記

ifcfg-eth0 ファイルは、RHEL 8 DVD ISO イメージには存在しないため、作成する必要があります。

```
DEVICE="eth0"  
ONBOOT="yes"  
BOOTPROTO="dhcp"  
TYPE="Ethernet"
```

```
USERCTL="yes"
PEERDNS="yes"
IPV6INIT="no"
```

4. すべての永続的なネットワークデバイスルールがある場合は削除します。

```
# rm -f /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
# rm -f /etc/udev/rules.d/75-persistent-net-generator.rules
# rm -f /etc/udev/rules.d/80-net-name-slot-rules
```

5. `ssh` が自動的に起動するように設定します。

```
# systemctl enable sshd
# systemctl is-enabled sshd
```

6. カーネルブートパラメーターを変更します。

- a. `/etc/default/grub` ファイルの `GRUB_CMDLINE_LINUX` 行の先頭に `crashkernel=256M` を追加します。`crashkernel=auto` が存在する場合は、`crashkernel=256M` に変更します。

- b. 次の行がない場合は、`GRUB_CMDLINE_LINUX` 行の末尾に追加します。

```
earlyprintk=ttyS0
console=ttyS0
rootdelay=300
```

- c. 以下のオプションが存在する場合は削除します。

```
rhgb
quiet
```

7. `grub.cfg` ファイルを再生成します。

```
# grub2-mkconfig -o /boot/grub2/grub.cfg
```

8. Windows Azure Linux Agent (WALinuxAgent) のインストールと有効化WALinuxAgent は、Red Hat Enterprise Linux 8 Application Stream (AppStream) に含まれています。[詳細は「AppStream の使用」](#)を参照してください。

```
# yum install WALinuxAgent -y
# systemctl enable waagent
```

9. `/etc/waagent.conf` で以下の行を編集して、プロビジョニングされた仮想マシン用にスワップ領域を設定します。プロビジョニングされた仮想マシンに適した swap 領域を設定します。

```
Provisioning.DeleteRootPassword=n
ResourceDisk.Filesystem=ext4
ResourceDisk.EnableSwap=y
ResourceDisk.SwapSizeMB=2048
```

プロビジョニングの準備

1. Red Hat Subscription Manager から仮想マシンの登録を解除します。

```
# subscription-manager unregister
```

- 既存のプロビジョニングの詳細をクリーンアップして、Azure プロビジョニング用に仮想マシンを準備します。Azure は、仮想マシンを Azure に再プロビジョニングします。このコマンドは、警告を生成しますが、これは正常です。

```
# waagent -force -deprovision
```

- シェル履歴をクリーンアップし、仮想マシンをシャットダウンします。

```
# export HISTSIZE=0
# poweroff
```

2.6. AZURE ACTIVE DIRECTORY アプリケーションの作成

Azure AD アプリケーションを作成するには、以下の手順を行います。Azure AD アプリケーションは、クラスター内のすべてのノードに対する HA 操作のアクセスを承認し、自動化します。

前提条件

[Azure コマンドラインインターフェース \(CLI\)](#) をインストールします。

手順

- Microsoft Azure サブスクリプションの管理者または所有者であることを確認します。Azure AD アプリケーションを作成するには、この承認が必要です。
- Azure アカウントにログインします。

```
$ az login
```

- 次のコマンドを実行して Azure AD アプリケーションを作成します。独自のパスワードを使用するには、**--password** オプションをコマンドに追加します。強固なパスワードを作成してください。

```
$ az ad sp create-for-rbac --name FencingApplicationName --role owner --scopes
"/subscriptions/SubscriptionID/resourceGroups/MyResourceGroup"
```

たとえば、以下ようになります。

```
[clouduser@localhost ~] $ az ad sp create-for-rbac --name FencingApp --role owner --
scopes "/subscriptions/2586c64b-xxxxxx-xxxxxx-xxxxxx/resourceGroups/azrhelclirgrp"
Retrying role assignment creation: 1/36
Retrying role assignment creation: 2/36
Retrying role assignment creation: 3/36
{
  "appId": "1a3dfe06-df55-42ad-937b-326d1c211739",
  "displayName": "FencingApp",
  "name": "http://FencingApp",
  "password": "43a603f0-64bb-482e-800d-402efe5f3d47",
  "tenant": "77ecef6b-xxxxxxxx-xxxxxx-757a69cb9485"
}
```

4. 続行する前に、以下の情報を保存します。フェンスエージェントを設定するには、この情報が必要です。
 - Azure AD アプリケーション ID
 - Azure AD アプリケーションのパスワード
 - テナント ID
 - Microsoft Azure サブスクリプション ID

関連情報

[View the access a user has to Azure resources](#)

2.7. イメージの固定 VHD 形式への変換

すべての Microsoft Azure 仮想マシンイメージは、固定 **VHD** 形式である必要があります。イメージは、VHD に変換する前に 1MB の境界で調整する必要があります。このセクションでは、必要に応じて、イメージを、**qcow2** 形式から固定の **VHD** 形式に変換して配置する方法を説明します。イメージを変換したら、Azure にアップロードできます。

手順

1. イメージを **qcow2** 形式から **raw** 形式に変換します。

```
$ qemu-img convert -f qcow2 -O raw <image-name>.qcow2 <image-name>.raw
```

2. 以下のコンテンツを使用してシェルスクリプトを作成します。

```
#!/bin/bash
MB=$((1024 * 1024))
size=$(qemu-img info -f raw --output json "$1" | gawk 'match($0, /"virtual-size": ([0-9]+)/, val)
{print val[1]}')
rounded_size=$((($size/$MB + 1) * $MB))
if [ $($size % $MB) -eq 0 ]
then
  echo "Your image is already aligned. You do not need to resize."
  exit 1
fi
echo "rounded size = $rounded_size"
export rounded_size
```

3. スクリプトを実行します。この例では **align.sh** という名前を使用します。

```
$ sh align.sh <image-xxx>.raw
```

- 「Your image is already aligned. You do not need to resize. (イメージはすでに整列しています。サイズを変更する必要はありません。)」と表示されたら、次の手順に進みます。
 - 値が表示されると、イメージは調整されません。
4. 次のコマンドを使用して、ファイルを固定 **VHD** 形式に変換します。
サンプルでは **qemu-img** バージョン 2.12.0 を使用します。

```
$ qemu-img convert -f raw -o subformat=fixed,force_size -O vpc <image-xxx>.raw
<image.xxx>.vhd
```

変換されると、**VHD** ファイルは Azure にアップロードする準備が整います。

イメージのアライメント

以下の手順は、**raw** ファイルの整列が行われていない場合にのみ行います。

1. 検証スクリプトの実行時に表示される丸め値を使用して、**raw** ファイルのサイズを変更します。

```
$ qemu-img resize -f raw <image-xxx>.raw <rounded-value>
```

2. **raw** イメージファイルを **VHD** 形式に変換します。
サンプルでは **qemu-img** バージョン 2.12.0 を使用します。

```
$ qemu-img convert -f raw -o subformat=fixed,force_size -O vpc <image-xxx>.raw
<image.xxx>.vhd
```

変換されると、**VHD** ファイルは Azure にアップロードする準備が整います。

2.8. AZURE イメージのアップロードおよび作成

以下の手順に従って、**VHD** ファイルをコンテナにアップロードし、Azure カスタムイメージを作成します。



注記

システムを再起動すると、エクスポートしたストレージ接続文字列は維持されません。以下の手順でいずれかのコマンドが失敗した場合は、再び接続文字列をエクスポートしてください。

手順

1. ストレージコンテナに **VHD** ファイルをアップロードします。これには数分かかる場合があります。ストレージコンテナの一覧を表示するには、**az storage container list** を実行します。

```
$ az storage blob upload --account-name <storage-account-name> --container-name
<container-name> --type page --file <path-to-vhd> --name <image-name>.vhd
```

たとえば、以下のようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az storage blob upload --account-name azrhelclstact --container-
name azrhelclstcont --type page --file rhel-image-8.vhd --name rhel-image-8.vhd
Percent complete: %100.0
```

2. アップロードした **VHD** ファイルの URL を以下の手順で取得します。

```
$ az storage blob url -c <container-name> -n <image-name>.vhd
```

たとえば、以下のようになります。


```
[clouduser@localhost]$ az storage blob url -c azrhelclstcont -n rhel-image-8.vhd
"https://azrhelclstact.blob.core.windows.net/azrhelclstcont/rhel-image-8.vhd"
```

3. Azure カスタムイメージを作成します。

```
$ az image create -n <image-name> -g <resource-group> -l <azure-region> --source <URL>
--os-type linux
```



注記

仮想マシンのハイパーバイザーのデフォルトの生成は V1 です。必要に応じて、**-hyper-v-generation V2** オプションを使用して V2 ハイパーバイザーの世代を指定できます。第 2 世代の仮想マシンは、UEFI ベースのブートアーキテクチャーを使用します。[第 2 世代の仮想マシンの詳細は、「Support for generation 2 VMs on Azure」を参照してください。](#)

このコマンドは、「Only blobs formatted as VHDs can be imported」(VHD としてフォーマットされたブローブのみがインポート可能) というエラーを返す場合があります。このエラーは、イメージが **VHD** に変換される前に最も近い 1MB の境界に合致していないことを意味します。

たとえば、以下ようになります。

```
[clouduser@localhost]$ az image create -n rhel8 -g azrhelclirgrp2 -l southcentralus --source
https://azrhelclstact.blob.core.windows.net/azrhelclstcont/rhel-image-8.vhd --os-type linux
```

2.9. RED HAT HA パッケージおよびエージェントのインストール

すべてのノードで以下の手順を実行します。

手順

1. SSH 端末セッションを起動し、管理者名とパブリック IP アドレスを使用して仮想マシンに接続します。

```
$ ssh administrator@PublicIP
```

Azure 仮想マシンのパブリック IP アドレスを取得するには、Azure ポータルで仮想マシンプロパティを開くか、以下の Azure CLI コマンドを入力します。

```
$ az vm list -g <resource-group> -d --output table
```

たとえば、以下ようになります。

```
[clouduser@localhost ~]$ az vm list -g azrhelclirgrp -d --output table
Name ResourceGroup PowerState PublicIps Location
-----
node01 azrhelclirgrp VM running 192.98.152.251 southcentralus
```

2. 仮想マシンを Red Hat に登録します。

```
$ sudo -i
# subscription-manager register --auto-attach
```



注記

--auto-attach コマンドが失敗する場合は、仮想マシンをサブスクリプションに手動で登録します。

3. すべてのリポジトリを無効にします。

```
# subscription-manager repos --disable=*
```

4. RHEL 8 Server リポジトリおよび RHEL 8 Server HA リポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-server-rpms
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-for-x86_64-highavailability-rpms
```

5. すべてのパッケージを更新します。

```
# yum update -y
```

6. Red Hat High Availability Add-On ソフトウェアパッケージと、使用可能なすべてのフェンスエージェントを、High Availability チャンネルからインストールします。

```
# yum install pcs pacemaker fence-agents-azure-arm
```

7. **hacluster** ユーザーは、前の手順で pcs および pacemaker のインストール時に作成されました。すべてのクラスターノードに **hacluster** のパスワードを作成します。すべてのノードに同じパスワードを使用します。

```
# passwd hacluster
```

8. **firewalld.service** がインストールされている場合は、RHEL ファイアウォールに **高可用性** サービスを追加します。

```
# firewall-cmd --permanent --add-service=high-availability
# firewall-cmd --reload
```

9. **pcs** サービスを起動し、システムの起動時に開始できるようにします。

```
# systemctl start pcsd.service
# systemctl enable pcsd.service
```

```
Created symlink from /etc/systemd/system/multi-user.target.wants/pcsd.service to /usr/lib/systemd/system/pcsd.service.
```

検証手順

pcs サービスが実行していることを確認します。

```
# systemctl status pcsd.service
pcsd.service - PCS GUI and remote configuration interface
```

```
Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/pcsd.service; enabled; vendor preset: disabled)
Active: active (running) since Fri 2018-02-23 11:00:58 EST; 1min 23s ago
Docs: man:pcsd(8)
      man:pcs(8)
Main PID: 46235 (pcsd)
CGroup: /system.slice/pcsd.service
└─46235 /usr/bin/ruby /usr/lib/pcs/pcsd > /dev/null &
```

2.10. クラスターの作成

ノードのクラスターを作成するには、以下の手順を実施します。

手順

1. ノードのいずれかで以下のコマンドを実行し、pcs ユーザー **hacluster** を認証します。コマンドで、クラスター内の各ノードの名前を指定します。

```
# pcs host auth hostname1 hostname2 hostname3
Username: hacluster
Password:
hostname1: Authorized
hostname2: Authorized
hostname3: Authorized
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs host auth node01 node02 node03
Username: hacluster
Password:
node01: Authorized
node02: Authorized
node03: Authorized
```

2. クラスターを作成します。

```
# pcs cluster setup cluster-name hostname1 hostname2 hostname3
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster setup --name newcluster node01 node02 node03
...omitted

Synchronizing pcsd certificates on nodes node01, node02, node03...
node02: Success
node03: Success
node01: Success
Restarting pcsd on the nodes in order to reload the certificates...
node02: Success
node03: Success
node01: Success
```

検証手順

1. クラスターを有効にします。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster enable --all
```

2. クラスターを起動します。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster start --all
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster enable --all
node02: Cluster Enabled
node03: Cluster Enabled
node01: Cluster Enabled
```

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster start --all
node02: Starting Cluster...
node03: Starting Cluster...
node01: Starting Cluster...
```

2.11. フェンシングの概要

クラスター内のノードの1つと通信が失敗した場合に、障害が発生したクラスターノードがアクセスする可能性があるリソースへのアクセスを、その他のノードが制限したり、解放したりできるようにする必要があります。クラスターノードが応答しない可能性があるため、そのクラスターノードと通信しても成功しません。代わりに、フェンスエージェントを使用した、フェンシングと呼ばれる外部メソッドを指定する必要があります。

応答しないノードがデータへのアクセスを続けている可能性があります。データが安全であることを確認する場合は、STONITHを使用してノードをフェンシングすることが唯一の方法になります。

STONITHは「Shoot The Other Node In The Head」の頭字語で、不安定なノードや同時アクセスによるデータの破損を防ぐことができます。STONITHを使用すると、別のノードからデータをアクセスする前に、そのノードが完全にオフラインであることを確認できます。

関連情報

[RHEL 高可用性クラスターでフェンシングが重要なのはなぜですか？](#)

2.12. フェンスデバイスの作成

フェンシングを構成するには、以下の手順を実行します。クラスターの任意のノードからこのコマンドを完了します。

前提条件

クラスタープロパティ **stonith-enabled** を **true** に設定する必要があります。

手順

1. 各 RHEL 仮想マシンの Azure ノード名を特定します。Azure ノード名を使用してフェンスデバイスを設定します。

```
# fence_azure_arm -l AD-Application-ID -p AD-Password --resourceGroup
MyResourceGroup --tenantId Tenant-ID --subscriptionId Subscription-ID -o list
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# fence_azure_arm -l e04a6a49-9f00-xxxx-xxxx-a8bdda4af447 -p
z/a05AwCN0lzAjVwXXXXXXXXXEWl0eVp0xg7QT//JE= --resourceGroup azrhelclirsgp --
tenantId 77ecef6b-cff0-XXXX-XXXX-757XXXX9485 --subscriptionId XXXXXXXX-38b4-4527-
XXXX-012d49dfc02c -o list
node01,
node02,
node03,
```

2. Azure ARM STONITH エージェントのオプションを表示します。

```
pcs stonith describe fence_azure_arm
```

たとえば、以下のようになります。

```
# pass:quotes[pcs stonith describe fence_apc]
Stonith options:
password: Authentication key
password_script: Script to run to retrieve password
```



警告

method オプションを提供するフェンスエージェントでは、cycle の値を指定しないため、データの破損が発生する可能性があるため、この値は指定しないでください。

1つのノードのみをフェンスできるフェンスデバイスや、複数のノードをフェンスできるデバイスもあります。フェンスデバイスの作成時に指定するパラメーターは、フェンスデバイスが対応しているか、必要としているかにより異なります。

フェンスデバイスの作成時に **pcmk_host_list** パラメーターを使用すると、フェンスデバイスで制御されるすべてのマシンを指定できます。

フェンスデバイスの作成時に **pcmk_host_map** パラメーターを使用すると、フェンスデバイスに関する仕様にホスト名をマッピングできます。

3. フェンスデバイスを作成します。

```
# pcs stonith create clusterfence fence_azure_arm
```

4. 他のノードのいずれかに対してフェンスエージェントをテストします。

```
# pcs stonith fence azurenodename
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs status
Cluster name: newcluster
```

```
Stack: corosync
Current DC: node01 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Feb 23 11:44:35 2018
Last change: Fri Feb 23 11:21:01 2018 by root via cibadmin on node01
```

```
3 nodes configured
1 resource configured
```

```
Online: [ node01 node03 ]
OFFLINE: [ node02 ]
```

Full list of resources:

```
clusterfence (stonith:fence_azure_arm): Started node01
```

Daemon Status:

```
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled
```

5. 前の手順でフェンシングされたノードを起動します。

```
# pcs cluster start hostname
```

6. ステータスを確認して、ノードが起動したことを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下ようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs status
Cluster name: newcluster
Stack: corosync
Current DC: node01 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Feb 23 11:34:59 2018
Last change: Fri Feb 23 11:21:01 2018 by root via cibadmin on node01
```

```
3 nodes configured
1 resource configured
```

```
Online: [ node01 node02 node03 ]
```

Full list of resources:

```
clusterfence (stonith:fence_azure_arm): Started node01
```

Daemon Status:

```
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled
```

関連情報

- [Red Hat High Availability クラスタでのフェンシングの設定](#)

- [フェンスデバイスの一般的なプロパティ](#)

2.13. AZURE 内部ロードバランサーの作成

Azure 内部ロードバランサーは、ヘルスプローブ要求に応答しないクラスターノードを削除します。

以下の手順を実行し、Azure 内部ロードバランサーを作成します。各ステップは特定の Microsoft 手順を参照し、HA のロードバランサーをカスタマイズするための設定が含まれます。

前提条件

[Azure コントロールパネル](#)

手順

1. [基本ロードバランサーを作成します](#)。IP アドレスの割り当てタイプの場合は、**内部ロードバランサー**、**基本 SKU**、および **動的** を選択します。
2. [バックエンドのアドレスプールを作成します](#)。バックエンドプールを HA に Azure リソースを作成した時に作成された可用性セットに関連付けます。ターゲットネットワーク IP 設定は設定しないでください。
3. [ヘルスプローブを作成します](#)。ヘルスプローブの場合は **TCP** を選択し、ポート **61000** を入力します。別のサービスに干渉しない TCP ポート番号を使用できます。特定の HA 製品アプリケーション (SAP HANA や SQL Server など) については、Microsoft と連携して使用する正しいポートを指定する必要がある場合があります。
4. [ロードバランサールールを作成します](#)。ロードバランシングルールを作成する場合は、デフォルト値が事前に設定されます。**フローティング IP (ダイレクトサーバーを返す)** を **有効** に設定してください。

2.14. ロードバランサーリソースエージェントの設定

ヘルスプローブを作成したら、**ロードバランサー リソースエージェント**を設定する必要があります。このリソースエージェントは、Azure ロードバランサーからヘルスプローブ要求に応答し、要求に応答しないクラスターノードを削除するサービスを実行します。

手順

1. 全ノードに **nmap-ncat** リソースエージェントをインストールします。

```
# yum install nmap-ncat resource-agents
```

単一ノードで以下の手順を実行します。

2. **pcs** リソースおよびグループを作成します。IPAddr2 アドレスにロードバランサーの FrontendIP を使用します。

```
# pcs resource create resource-name IPAddr2 ip="10.0.0.7" --group cluster-resources-group
```

3. **ロードバランサー** リソースエージェントを設定します。

```
# pcs resource create resource-loadbalancer-name azure-lb port=port-number --group
cluster-resources-group
```

検証手順

pcs status を実行して結果を表示します。

```
[root@node01 clouduser]# pcs status
```

たとえば、以下のようになります。

```
Cluster name: clusterfence01
Stack: corosync
Current DC: node02 (version 1.1.16-12.el7_4.7-94ff4df) - partition with quorum
Last updated: Tue Jan 30 12:42:35 2018
Last change: Tue Jan 30 12:26:42 2018 by root via cibadmin on node01

3 nodes configured
3 resources configured

Online: [ node01 node02 node03 ]

Full list of resources:

clusterfence (stonith:fence_azure_arm):    Started node01
Resource Group: g_azure
  vip_azure (ocf::heartbeat:IPaddr2):    Started node02
  lb_azure (ocf::heartbeat:azure-lb):    Started node02

Daemon Status:
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled
```

2.15. 共有ブロックストレージの設定

このセクションでは、Microsoft Azure Shared Disks を使用して Red Hat High Availability クラスタに共有ブロックストレージを設定するオプションの手順を説明します。この手順では、1TB 共有ディスクを持つ 3 つの Azure 仮想マシン (3 ノードクラスタ) を想定しています。



注記

これは、ブロックストレージを設定するスタンドアロンの例です。この手順では、クラスタを作成していないことを前提としています。

前提条件

- ホストシステムに Azure CLI をインストールし、SSH キーを作成している。
- 以下リソースの作成を含むクラスタ環境を Azure で作成している。リンクは、Microsoft Azure のドキュメントにあります。
 - [リソースグループ](#)

- 仮想ネットワーク
- ネットワークセキュリティグループ
- ネットワークセキュリティグループルール
- Subnet(s)
- ロードバランサー (オプション)
- ストレージアカウント
- 近接配置グループ
- 可用性セット

手順

1. Azure コマンド **az disk create** を使用して、共有ブロックボリュームを作成します。

```
$ az disk create -g <resource_group> -n <shared_block_volume_name> --size-gb  
<disk_size> --max-shares <number_vms> -l <location>
```

たとえば、以下のコマンドは、Azure Availability Zone **westcentralus** 内のリソースグループ **sharedblock** に **shared-block-volume.vhd** という名前の共有ブロックボリュームを作成します。

```
$ az disk create -g sharedblock-rg -n shared-block-volume.vhd --size-gb 1024 --max-shares  
3 -l westcentralus
```

```
{  
  "creationData": {  
    "createOption": "Empty",  
    "galleryImageReference": null,  
    "imageReference": null,  
    "sourceResourceId": null,  
    "sourceUniqueId": null,  
    "sourceUri": null,  
    "storageAccountId": null,  
    "uploadSizeBytes": null  
  },  
  "diskAccessId": null,  
  "diskIopsReadOnly": null,  
  "diskIopsReadWrite": 5000,  
  "diskMbpsReadOnly": null,  
  "diskMbpsReadWrite": 200,  
  "diskSizeBytes": 1099511627776,  
  "diskSizeGb": 1024,  
  "diskState": "Unattached",  
  "encryption": {  
    "diskEncryptionSetId": null,  
    "type": "EncryptionAtRestWithPlatformKey"  
  },  
  "encryptionSettingsCollection": null,  
  "hyperVgeneration": "V1",  
  "id": "/subscriptions/12345678910-12345678910/resourceGroups/sharedblock-
```

```
rg/providers/Microsoft.Compute/disks/shared-block-volume.vhd",
  "location": "westcentralus",
  "managedBy": null,
  "managedByExtended": null,
  "maxShares": 3,
  "name": "shared-block-volume.vhd",
  "networkAccessPolicy": "AllowAll",
  "osType": null,
  "provisioningState": "Succeeded",
  "resourceGroup": "sharedblock-rg",
  "shareInfo": null,
  "sku": {
    "name": "Premium_LRS",
    "tier": "Premium"
  },
  "tags": {},
  "timeCreated": "2020-08-27T15:36:56.263382+00:00",
  "type": "Microsoft.Compute/disks",
  "uniqueId": "cd8b0a25-6fbe-4779-9312-8d9cbb89b6f2",
  "zones": null
}
```

2. Azure コマンド **az disk show** を使用して共有ブロックボリュームを作成していることを確認します。

```
$ az disk show -g <resource_group> -n <shared_block_volume_name>
```

たとえば、次のコマンドは、リソースグループ **sharedblock-rg** 内の共有ブロックボリューム **shared-block-volume.vhd** の詳細を表示します。

```
$ az disk show -g sharedblock-rg -n shared-block-volume.vhd

{
  "creationData": {
    "createOption": "Empty",
    "galleryImageReference": null,
    "imageReference": null,
    "sourceResourceId": null,
    "sourceUniqueId": null,
    "sourceUri": null,
    "storageAccountId": null,
    "uploadSizeBytes": null
  },
  "diskAccessId": null,
  "diskIopsReadOnly": null,
  "diskIopsReadWrite": 5000,
  "diskMbpsReadOnly": null,
  "diskMbpsReadWrite": 200,
  "diskSizeBytes": 1099511627776,
  "diskSizeGb": 1024,
  "diskState": "Unattached",
  "encryption": {
    "diskEncryptionSetId": null,
    "type": "EncryptionAtRestWithPlatformKey"
  },
}
```

```

"encryptionSettingsCollection": null,
"hyperVgeneration": "V1",
"id": "/subscriptions/12345678910-12345678910/resourceGroups/sharedblock-
rg/providers/Microsoft.Compute/disks/shared-block-volume.vhd",
"location": "westcentralus",
"managedBy": null,
"managedByExtended": null,
"maxShares": 3,
"name": "shared-block-volume.vhd",
"networkAccessPolicy": "AllowAll",
"osType": null,
"provisioningState": "Succeeded",
"resourceGroup": "sharedblock-rg",
"shareInfo": null,
"sku": {
  "name": "Premium_LRS",
  "tier": "Premium"
},
"tags": {},
"timeCreated": "2020-08-27T15:36:56.263382+00:00",
"type": "Microsoft.Compute/disks",
"uniqueId": "cd8b0a25-6fbe-4779-9312-8d9cbb89b6f2",
"zones": null
}

```

3. Azure コマンド **az network nic create** を使用して、3つのネットワークインターフェースを作成します。それぞれ異なる **<nic_name>** を使用して、以下のコマンドを実行します。

```

$ az network nic create -g <resource_group> -n <nic_name> --subnet <subnet_name> --
vnet-name <virtual_network> --location <location> --network-security-group
<network_security_group> --private-ip-address-version IPv4

```

たとえば、以下のコマンドは、**sharedblock-nodea-vm-nic-protected** という名前のネットワークインターフェースを作成します。

```

$ az network nic create -g sharedblock-rg -n sharedblock-nodea-vm-nic-protected --subnet
sharedblock-subnet-protected --vnet-name sharedblock-vn --location westcentralus --
network-security-group sharedblock-nsg --private-ip-address-version IPv4

```

4. Azure コマンド **az vm create** を使用して3つの仮想マシンを作成し、共有ブロックボリュームを割り当てます。オプションの値は、各仮想マシンに独自の **<vm_name>**、**<new_vm_disk_name>**、**<nic_name>** を持つ点で異なります。

```

$ az vm create -n <vm_name> -g <resource_group> --attach-data-disks
<shared_block_volume_name> --data-disk-caching None --os-disk-caching ReadWrite --os-
disk-name <new-vm-disk-name> --os-disk-size-gb <disk_size> --location <location> --size
<virtual_machine_size> --image <image_name> --admin-username <vm_username> --
authentication-type ssh --ssh-key-values <ssh_key> --nics <nic_name> --availability-set
<availability_set> --ppg <proximity_placement_group>

```

たとえば、次のコマンドは、**sharedblock-nodea-vm** という名前の仮想マシンを作成します。

```

$ az vm create -n sharedblock-nodea-vm -g sharedblock-rg --attach-data-disks shared-
block-volume.vhd --data-disk-caching None --os-disk-caching ReadWrite --os-disk-name

```

```
sharedblock-nodea-vm.vhd --os-disk-size-gb 64 --location westcentralus --size
Standard_D2s_v3 --image /subscriptions/12345678910-
12345678910/resourceGroups/sample-
azureimagesgroupwestcentralus/providers/Microsoft.Compute/images/sample-azure-rhel-
8.3.0-20200713.n.0.x86_64 --admin-username sharedblock-user --authentication-type ssh --
ssh-key-values @sharedblock-key.pub --nics sharedblock-nodea-vm-nic-protected --
availability-set sharedblock-as --ppg sharedblock-ppg
```

```
{
  "fqdns": "",
  "id": "/subscriptions/12345678910-12345678910/resourceGroups/sharedblock-
rg/providers/Microsoft.Compute/virtualMachines/sharedblock-nodea-vm",
  "location": "westcentralus",
  "macAddress": "00-22-48-5D-EE-FB",
  "powerState": "VM running",
  "privateIpAddress": "198.51.100.3",
  "publicIpAddress": "",
  "resourceGroup": "sharedblock-rg",
  "zones": ""
}
```

検証手順

1. クラスタ内の各仮想マシンについて、仮想マシン `<ip_address>` で **SSH** コマンドを使用して、ブロックデバイスが利用できることを確認します。

```
# ssh <ip_address> "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T '"
```

たとえば、次のコマンドは、仮想マシン IP **198.51.100.3** のホスト名およびブロックデバイスを含む詳細を一覧表示します。

```
# ssh 198.51.100.3 "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T '"
```

```
nodea
sdb 8:16 0 1T 0 disk
```

2. **SSH** コマンドを使用して、クラスタ内の各仮想マシンが同じ共有ディスクを使用していることを確認します。

```
# ssh <ip_address> "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T ' | awk '{print \$1}' | xargs -i udevadm info
--query=all --name=/dev/{ } | grep '^E: ID_SERIAL='"
```

たとえば、以下のコマンドは、インスタンス IP アドレス **198.51.100.3** のホスト名および共有ディスクボリューム ID が含まれる詳細を一覧表示します。

```
# ssh 198.51.100.3 "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T ' | awk '{print \$1}' | xargs -i udevadm info -
-query=all --name=/dev/{ } | grep '^E: ID_SERIAL='"
```

```
nodea
E: ID_SERIAL=3600224808dd8eb102f6ffc5822c41d89
```

共有ディスクが各仮想マシンに割り当てられていることを確認したら、クラスタの回復性の高いストレージを設定できます。Red Hat High Availability [クラスタに回復性の高いストレージを設定する方法](#)は、「[クラスタに GFS2 ファイルシステムを設定](#)」を参照してください。GFS2 ファイルシステムに

関する一般的な情報は、「[GFS2 ファイルシステムの設定](#)」を参照してください。

第3章 AMAZON WEB SERVICES での EC2 インスタンスとしての RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージのデプロイメント

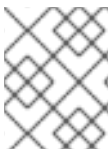
Amazon Web Services (AWS) に EC2 インスタンスとして Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 8 イメージをデプロイするオプションは多数あります。本章では、イメージを選択するオプションを説明し、ホストシステムおよび仮想マシンのシステム要件の一覧を紹介します。本章では、ISO イメージからカスタム VM を作成し、そのイメージを EC2 にアップロードして、EC2 インスタンスを起動する手順も説明します。



重要

ISO イメージからカスタム仮想マシンを作成することは可能ですが、Red Hat Image Builder 製品を使用して、特定のクラウドプロバイダーで使用するようカスタマイズされたイメージを作成することを推奨します。Image Builder を使用すると、AMI (Amazon Machine Image **ami** 形式) を作成およびアップロードできます。詳細は「[RHEL システムイメージのカスタマイズの作成](#)」を参照してください。

この章では、Amazon のドキュメントを参照している箇所が多数あります。手順の詳細は、参照している Amazon ドキュメントを確認してください。



注記

AWS でセキュアに使用できる Red Hat 製品の一覧は、「[Red Hat on Amazon Web Services](#)」を参照してください。

前提条件

- [Red Hat カスタマーポータル](#) のアカウントにサインアップします。
- AWS にサインアップして、AWS リソースを設定します。詳細は「[Setting Up with Amazon EC2](#)」を参照してください。
- [Red Hat Cloud Access プログラム](#) でサブスクリプションを有効にします。Red Hat Cloud Access プログラムでは、Red Hat のサブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートのある AWS へ移動できます。

関連情報

- [Red Hat Cloud Access Reference Guide](#)
- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [Red Hat Enterprise Linux on Amazon EC2 - FAQs](#)
- [Amazon EC2での設定](#)
- [Red Hat on Amazon Web Services](#)

3.1. AWS での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション

以下の表には、イメージの選択肢を記載し、イメージオプションの相違点を示しています。

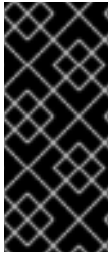
表3.1イメージオプション

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
Red Hat Gold Image のデプロイを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラムを使用してサブスクリプションを有効にし、AWS で Red Hat Gold Image を選択します。	<p>その他のすべてのインスタンスコストを Amazon 社に支払うこととなりますが、サブスクリプション自体には Red Hat 製品コストが含まれます。</p> <p>Red Hat Gold Image は、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。</p>
AWS に移動するカスタムイメージをデプロイすることを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラムを使用してサブスクリプションを有効にし、カスタムイメージをアップロードし、サブスクリプションを割り当てます。	<p>その他のすべてのインスタンスコストを Amazon 社に支払うこととなりますが、サブスクリプション自体には Red Hat 製品コストが含まれます。</p> <p>AWS に移行するカスタムイメージは、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。</p>
RHEL を含む既存の Amazon イメージをデプロイすることを選択する	AWS EC2 イメージには Red Hat 製品が含まれる	AWS マネジメントコンソールでインスタンスの起動時に RHEL イメージを選択するか、AWS Marketplace からイメージを選択します。	<p>Amazon 社に、従量課金モデルで1時間ごとに支払います。このようなイメージは「オンデマンド」イメージと呼ばれています。Amazon 社はオンデマンドイメージをサポートします。</p> <p>Red Hat は、イメージの更新を提供します。AWS により、Red Hat Update Infrastructure (RHUI) から更新を利用できるようにします。</p>



注記

Red Hat Image Builder を使用して、AWS 用のカスタムイメージを作成できます。詳細は「[RHEL システムイメージのカスタマイズの作成](#)」を参照してください。



重要

オンデマンドインスタンスは、Red Hat Cloud Access インスタンスに変換できません。オンデマンドイメージから Red Hat Cloud Access bring-your-own-subscription (BYOS) イメージに変更するには、Red Hat Cloud Access インスタンスを新たに作成し、オンデマンドインスタンスからデータを移行します。データを移行した後に、オンデマンドのインスタンスをキャンセルして二重請求を回避します。

本章の残りの部分には、カスタムイメージに関する情報および手順が記載されています。

関連情報

- [Red Hat Cloud Access プログラム](#)
- [RHEL システムイメージのカスタマイズの作成](#)
- [AWS マネジメントコンソール](#)
- [AWS Marketplace](#)

3.2. ベースイメージの理解

本セクションでは、事前設定されたベースイメージおよびその設定を使用する方法を説明します。

3.2.1. カスタムベースイメージの使用

仮想マシンを手動で設定するには、ベース (スタートアップ) 仮想マシンイメージで開始します。ベース仮想マシンイメージを作成したら、構成設定を変更して、仮想マシンがクラウドで動作するために必要なパッケージを追加できます。イメージのアップロード後に、特定のアプリケーションに追加の設定変更を行うことができます。

関連情報

[Red Hat Enterprise Linux](#)

3.2.2. 仮想マシン構成設定

クラウド仮想マシンには、以下の構成設定が必要です。

表3.2 仮想マシンの構成設定

設定	推奨事項
ssh	仮想マシンへのリモートアクセスを確立するには、SSH を有効にする必要があります。
dhcp	プライマリ仮想アダプターは、dhcp 用に設定する必要があります。

3.3. ISO イメージからのベース仮想マシンの作成

このセクションの手順に従って、ISO イメージからベースイメージを作成します。

前提条件

Red Hat Enterprise Linux 8 [ホストマシンの仮想化を有効にします](#)。

3.3.1. ISO イメージのダウンロード

手順

1. Red Hat [カスタマーポータル](#)から最新の Red Hat Enterprise Linux ISO Image をダウンロードします。
2. イメージを `/var/lib/libvirt/images` に移動します。

3.3.2. ISO イメージからの仮想マシンの作成

手順

1. 仮想化用のホストマシンを有効にしていることを確認します。 [設定および手順は、「RHEL 8 で仮想化を有効にする」](#)を参照してください。
2. 基本的な Red Hat Enterprise Linux 仮想マシンを作成し、起動します。 [手順は、「仮想マシンの作成」](#)を参照してください。
 - a. コマンドラインを使用して仮想マシンを作成する場合は、デフォルトのメモリーと CPU を仮想マシンの容量に設定するようにしてください。仮想ネットワークインターフェースを `virtio` に設定します。
基本的なコマンドラインの例を以下に示します。

```
virt-install --name isotest --memory 2048 --vcpus 2 --disk size=8,bus=virtio --location  
rhel-8.0-x86_64-dvd.iso --os-variant=rhel8.0
```

- b. Web コンソールを使用して仮想マシンを作成する場合は、「[Web コンソールで仮想マシンの作成](#)」の手順を行います。以下の点に注意してください。
 - **仮想マシンをすぐに起動** は選択しないでください。
 - **メモリー と ストレージのサイズ** を、希望の設定に変更します。
 - インストールを開始する前に、**仮想ネットワークインターフェース設定** で **モデル** を `virtio` に変更し、**vCPUs** を仮想マシンの容量設定に変更していることを確認します。

3.3.3. RHEL インストールの完了

仮想マシンが起動したら、以下の手順を実行してインストールを完了し、root アクセスを有効にします。

手順

1. インストールプロセス中に使用する言語を選択します。

2. **インストール概要** ビューで、以下を行います。
 - a. **ソフトウェアの選択** をクリックし、**最小インストール** を選択します。
 - b. **完了** をクリックします。
 - c. **インストール先** をクリックし、**ストレージ設定** で **カスタム** を選択します。
 - **/boot** で、500 MB 以上であることを確認してください。残りの領域は、**root /** に使用できます。
 - 標準のパーティションが推奨されますが、論理ボリューム管理 (LVM) を使用することも可能です。
 - ファイルシステムには、**xf**s、**ext4**、**ext3** などを使用できます。
 - 変更が完了したら、**完了** をクリックします。
3. **インストールの開始** をクリックします。
4. **Root パスワード** を設定します。必要に応じて、他のユーザーを作成します。
5. インストールが完了したら、仮想マシンを再起動して **root** でログインします。
6. イメージを設定します。



注記

cloud-init パッケージがインストールされ、有効になっていることを確認します。

7. **重要:** この手順は、AWS にアップロードする仮想マシンにのみ行います。
 - a. x86 仮想マシンの場合は、**nvme** ドライバー、**xen-netfront** ドライバー、および **xen-blkfront** ドライバー をインストールします。

```
# dracut -f --add-drivers "nvme xen-netfront xen-blkfront"
```

- b. aarch64 仮想マシンの場合は、**nvme** ドライバーをインストールします。

```
# dracut -f --add-drivers "nvme"
```

これらのドライバーを含めると、dracut タイムアウトの可能性がなくなります。

ここでは、ドライバーを **/etc/dracut.conf.d/** に追加し、**dracut -f** を入力して既存の **initramfs** ファイルを上書きできます。

8. 仮想マシンの電源をオフにします。

3.4. RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージの AWS へのアップロード

このセクションの手順に従って、イメージを AWS にアップロードします。

3.4.1. AWS CLI のインストール

本章の多くの手順には、AWS CLI の使用が含まれます。AWS CLI をインストールするには、以下の手順を実行します。

前提条件

AWS アクセスキー ID および AWS シークレットアクセスキーを作成してアクセスできる。[情報および手順は、「AWS CLI の設定」](#)を参照してください。

手順

1. Python 3 および **pip** ツールをインストールします。

```
# yum install python3
# yum install python3-pip
```

2. **pip** コマンドを使用して、[AWS コマンドラインツール](#) をインストールします。

```
# pip3 install awscli
```

3. **aws --version** コマンドを実行して、AWS CLI をインストールしたことを確認します。

```
$ aws --version
aws-cli/1.16.182 Python/2.7.5 Linux/3.10.0-957.21.3.el7.x86_64 botocore/1.12.172
```

4. AWS アクセスの詳細に従って、AWS コマンドラインクライアントを設定します。

```
$ aws configure
AWS Access Key ID [None]:
AWS Secret Access Key [None]:
Default region name [None]:
Default output format [None]:
```

関連情報

- [AWS CLI の設定](#)
- [AWS コマンドラインツール](#)

3.4.2. S3 バケットの作成

AWS にインポートするには、Amazon S3 バケットが必要です。Amazon S3 バケットは、オブジェクトを格納する Amazon リソースです。イメージのアップロードプロセスの一環として、S3 バケットを作成し、イメージをバケットに移動します。以下の手順に従って、バケットを作成します。

手順

1. [Amazon S3 コンソール](#) を起動します。
2. **Create Bucket** をクリックします。**Create Bucket** ダイアログが表示されます。
3. **Name and region** ビューで、以下を行います。
 - a. **Bucket name** を入力します。

- b. **Region** を入力します。
 - c. **次へ** をクリックします。
4. **Configure options** ビューでは、目的のオプションを選択し、**Next** をクリックします。
 5. **Set permissions** ビューで、デフォルトのオプションを変更または受け入れ、**Next** をクリックします。
 6. バケットの設定を確認します。
 7. **Create bucket** をクリックします。



注記

AWS CLI を使用してバケットを作成することもできます。たとえば、**aws s3 mb s3://my-new-bucket** コマンドは、**my-new-bucket** という名前の S3 バケットを作成します。**mb** コマンドの詳細は、「[AWS CLI Command Reference](#)」を参照してください。

関連情報

- [Amazon S3 Console](#)
- [AWS CLI コマンドリファレンス](#)

3.4.3. vmimport ロールの作成

仮想マシンのインポートに必要な **vmimport** ロールを作成するには、以下の手順を実行します。詳細は、Amazon [ドキュメント](#)の「[VM Import Service Role](#)」を参照してください。

手順

1. **trust-policy.json** という名前のファイルを作成し、以下のポリシーを追加します。システムの任意の場所にファイルを保存し、その場所を書き留めます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": { "Service": "vmie.amazonaws.com" },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "sts:Externalid": "vmimport"
        }
      }
    }
  ]
}
```

2. **create role** コマンドを実行して **vmimport** ロールを作成します。**trust-policy.json** ファイルの場所への完全なパスを指定します。**file://** の接頭辞をパスに設定します。以下に例を示します。

```
aws iam create-role --role-name vmimport --assume-role-policy-document
file:///home/sample/ImportService/trust-policy.json
```

3. **role-policy.json** という名前のファイルを作成し、以下のポリシーを追加します。 **s3-bucket-name** を、S3 バケットの名前に置き換えます。

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement":[
    {
      "Effect":"Allow",
      "Action":[
        "s3:GetBucketLocation",
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource":[
        "arn:aws:s3:::s3-bucket-name",
        "arn:aws:s3:::s3-bucket-name/*"
      ]
    },
    {
      "Effect":"Allow",
      "Action":[
        "ec2:ModifySnapshotAttribute",
        "ec2:CopySnapshot",
        "ec2:RegisterImage",
        "ec2:Describe*"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

4. **put-role-policy** コマンドを使用して、作成したロールにポリシーを割り当てます。 **role-policy.json** ファイルの完全パスを指定します。以下に例を示します。

```
aws iam put-role-policy --role-name vmimport --policy-name vmimport --policy-document
file:///home/sample/ImportService/role-policy.json
```

関連情報

- [VM インポートサービスロール](#)
- [必要なサービスロール](#)

3.4.4. イメージの S3 への変換およびプッシュ

イメージを S3 に変換してプッシュするには、以下の手順を実行します。サンプルは典型的なもので、**qcow2** ファイル形式でフォーマットされたイメージを **raw** 形式に変換します。Amazon では、**OVA**、**VHD**、**VHDX**、**VMDK**、および **raw** の形式のイメージを利用できます。Amazon で利用できるイメージ形式の詳細は、「[VM import/Export の仕組み](#)」を参照してください。

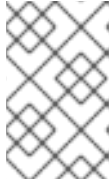
手順

1. **qemu-img** コマンドを実行してイメージを変換します。以下に例を示します。

```
qemu-img convert -f qcow2 -O raw rhel-8.2-sample.qcow2 rhel-8.2-sample.raw
```

2. イメージを S3 にプッシュします。

```
aws s3 cp rhel-8.2-sample.raw s3://s3-bucket-name
```



注記

この手順では数分かかる場合があります。完了したら、AWS S3 コンソールを使用して、イメージが S3 バケットに正常にアップロードされたことを確認できます。

関連情報

- [VM のインポート/エクスポートの仕組み](#)
- [AWS S3 コンソール](#)

3.4.5. イメージのスナップショットとしてのインポート

イメージをスナップショットとしてインポートするには、以下の手順を実行します。

手順

1. イメージのバケットとパスを指定するファイルを作成します。**container.json** ファイルに名前を付けます。以下の例では、**s3-bucket-name** をバケット名に置き換え、**s3-key** を鍵に置き換えます。Amazon S3 コンソールを使用して、イメージの鍵を取得できます。

```
{
  "Description": "rhel-8.2-sample.raw",
  "Format": "raw",
  "UserBucket": {
    "S3Bucket": "s3-bucket-name",
    "S3Key": "s3-key"
  }
}
```

2. イメージをスナップショットとしてインポートします。この例では、パブリックの Amazon S3 ファイルを使用しています。Amazon S3 コンソールを使用して、バケットのパーミッション設定を変更できます。

```
aws ec2 import-snapshot --disk-container file://containers.json
```

端末は以下のようなメッセージを表示します。メッセージ内の **ImportTaskID** を書き留めます。

```
{
  "SnapshotTaskDetail": {
    "Status": "active",
    "Format": "RAW",
    "DiskImageSize": 0.0,
```

```
"UserBucket": {
  "S3Bucket": "s3-bucket-name",
  "S3Key": "rhel-8.2-sample.raw"
},
"Progress": "3",
"StatusMessage": "pending"
},
"ImportTaskId": "import-snap-06cea01fa0f1166a8"
}
```

3. **describe-import-snapshot-tasks** コマンドを使用して、インポートの進行状況を追跡します。**ImportTaskID** を含めます。

```
aws ec2 describe-import-snapshot-tasks --import-task-ids import-snap-06cea01fa0f1166a8
```

返されるメッセージには、タスクの現在の状態が表示されます。完了したら、**Status** は **completed** になります。ステータスに記載されているスナップショット ID を書き留めます。

関連情報

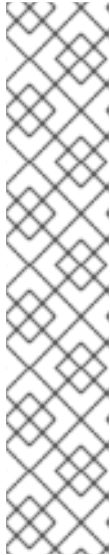
- [Amazon S3 Console](#)
- [VM Import/Export を使用したスナップショットとしてのディスクのインポート](#)

3.4.6. アップロードしたスナップショットからの AMI の作成

EC2 では、インスタンスの起動時に Amazon Machine Image (AMI) を選択する必要があります。アップロードしたスナップショットから AMI を作成するには、以下の手順を行います。

手順

1. AWS EC2 Dashboard に移動します。
2. **Elastic Block Store** で **スナップショット** を選択します。
3. スナップショット ID (例: **snap-0e718930bd72bcda0**) を検索します。
4. スナップショットを右クリックして、**イメージの作成** を選択します。
5. イメージに名前を付けます。
6. **仮想化のタイプ** で、**ハードウェア仮想化支援機能** を選択します。
7. **作成** をクリックします。イメージ作成に関する注意事項に、イメージへのリンクがあります。
8. イメージリンクをクリックします。**Images>AMI** の下にイメージが表示されます。



注記

また、AWS CLI の **register-image** コマンドを使用して、スナップショットから AMI を作成できます。詳細は、「[register-image](#)」を参照してください。以下に例を示します。

```
$ aws ec2 register-image --name "myimagenam" --description
"myimagedescription" --architecture x86_64 --virtualization-type hvm --root-
device-name "/dev/sda1" --block-device-mappings "{\"DeviceName\":
\"/dev/sda1\", \"Ebs\": {\"SnapshotId\": \"snap-0ce7f009b69ab274d\"}}\" --ena-
support
```

root デバイスボリューム **/dev/sda1** を **root-device-name** として指定する必要があります。AWS の [デバイスマッピングの概念情報](#) は、「[ブロックデバイスマッピングの例](#)」を参照してください。

3.4.7. AMI からのインスタンスの起動

AMI からインスタンスを起動して設定するには、以下の手順を行います。

手順

1. AWS EC2 Dashboard から、**Images** を選択して、**AMI** を選択します。
2. イメージを右クリックして、**Launch** を選択します。
3. ワークロードの要件を **Instance Typ** を選択します。
[インスタンスタイプに関する情報は、「Amazon EC2 Instance Types」](#)を参照してください。
4. **Next:Configure Instance Details** をクリックします。
 - a. 作成する **インスタンス数** を入力します。
 - b. **Network** で、[AWS 環境でのセットアップ](#) の際に作成した VPC を選択します。インスタンスのサブネットを選択するか、新しいサブネットを作成します。
 - c. 自動割り当てパブリック IP では、**Enable** を選択します。



注記

これらは、基本インスタンスの作成に必要な最小限の設定オプションです。アプリケーション要件に応じて追加オプションを確認します。

5. **Next: Add Storage** をクリックします。デフォルトのストレージが十分であることを確認してください。
6. **Next: Add Tags** をクリックします。



注記

タグを使用すると、AWS リソースの管理に役立ちます。[タグ付けの詳細は、「Amazon EC2 リソースにタグを付ける」](#)を参照してください。

7. **Next:Configure Security Group** をクリックします。[AWS 環境でのセットアップ](#) 時に作成したセキュリティグループを選択します。
8. **Review and Launch** をクリックします。選択内容を確認します。
9. **Launch** をクリックします。既存の鍵のペアの選択、または新しい鍵のペアの作成に関するダイアログが表示されます。[AWS 環境でのセットアップ](#) 時に作成した鍵のペアを選択します。



注記

秘密鍵のパーミッションが正しいことを確認します。必要に応じて **chmod 400 <keyname>.pem** コマンドオプションを使用してパーミッションを変更します。

10. **Launch Instances** をクリックします。
11. **View Instances** をクリックします。インスタンスに名前を付けることができます。インスタンスを選択して **Connect** をクリックすると、インスタンスへの SSH セッションを開始できます。[A standalone SSH client](#) に記載されている例を使用してください。



注記

または、AWS CLI を使用してインスタンスを起動することもできます。詳細は、Amazon [ドキュメント](#) の「[Launching, Listing, and Terminating Amazon EC2 Instances](#)」を参照してください。

関連情報

- [AWS マネジメントコンソール](#)
- [Amazon EC2での設定](#)
- [Amazon EC2 インスタンス](#)
- [Amazon EC2 インスタンスタイプ](#)

3.4.8. Red Hat サブスクリプションの割り当て

Red Hat Cloud Access プログラムで有効になっているサブスクリプションを割り当てるには、以下の手順を行います。

前提条件

サブスクリプションが有効になっている。

手順

1. システムを登録します。

```
subscription-manager register --auto-attach
```

2. サブスクリプションを割り当てます。

- アクティベーションキーを使用して、サブスクリプションを割り当てることはできません。詳細は、「[カスタマーポータル](#)のアクティベーションキーを作成する」を参照してください。

- または、サブスクリプションプール (Pool ID) の ID を使用してサブスクリプションを手動で割り当てることができます。「[コマンドラインでのサブスクリプションのアタッチと削除](#)」を参照してください。

関連情報

- [カスタマーポータルでのアクティベーションキーを作成する](#)
- [コマンドラインでのサブスクリプションのアタッチと削除](#)
- [Red Hat Subscription Manager の使用および設定](#)

3.4.9. AWS Gold Image での自動登録の設定

Amazon Web Services(AWS)に RHEL 8 仮想マシンをデプロイするのを高速にするために、RHEL 8 の Gold Images を Red Hat Subscription Manager(RHSM)に自動的に登録するように設定できます。

前提条件

- AWS 用の最新の RHEL 8 Gold Image をダウンロードしている。手順は、「[AWS での Gold Image の使用](#)」を参照してください。



注記

AWS アカウントは一度に単一の Red Hat アカウントにのみ割り当てることができます。したがって、Red Hat に割り当てる前に、他のユーザーが AWS アカウントへのアクセスを必要としないことを確認します。

Procedure

1. Gold Image を AWS にアップロードします。手順については、「[Red Hat Enterprise Linux イメージの AWS へのアップロード](#)」を参照してください。
2. アップロードしたイメージを使用して仮想マシンを作成します。RHSM に自動的にサブスクライブされます。

検証

- 上記の手順に従って作成された RHEL 8 仮想マシンで、**subscription-manager identity** コマンドを実行して、システムが RHSM に登録されていることを確認します。正常に登録されたシステムでは、システムの UUID が表示されます。以下に例を示します。

```
# subscription-manager identity
system identity: fdc46662-c536-43fb-a18a-bbcb283102b7
name: 192.168.122.222
org name: 6340056
org ID: 6340056
```

関連情報

- [AWS マネジメントコンソール](#)
- [Red Hat サービスのクラウドソースの設定](#)

第4章 AWS での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定

本章では、EC2 インスタンスをクラスターノードとして使用し、Amazon Web Services (AWS) での Red Hat High Availability (HA) クラスターを設定する情報および手順を説明します。クラスターに使用する Red Hat Enterprise Linux (RHEL) イメージを取得するオプションは複数あることに注意してください。AWS のイメージオプションの詳細は、[「AWS での Red Hat Enterprise Linux Image オプション」](#)を参照してください。

本章では、AWS の環境設定の前提条件を説明します。環境を設定したら、EC2 インスタンスを作成および設定できます。

本章では、個別のノードを AWS の HA ノードのクラスターに変換する HA クラスターの作成に固有の手順も説明します。これには、各クラスターノードに高可用性パッケージおよびエージェントをインストールし、フェンシングを設定し、AWS ネットワークリソースエージェントをインストールする手順が含まれます。

この章では、Amazon のドキュメントを参照している箇所が多数あります。多くの手順に関する詳細は、参照している Amazon ドキュメントを確認してください。

前提条件

- [Red Hat カスタマーポータル](#) のアカウントにサインアップします。
- AWS にサインアップして、AWS リソースを設定します。詳細は [「Setting Up with Amazon EC2」](#) を参照してください。
- [Red Hat Cloud Access プログラム](#) でサブスクリプションを有効にします。Red Hat Cloud Access プログラムでは、Red Hat のサブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートのある AWS へ移動できます。

関連情報

- [Red Hat Cloud Access Reference Guide](#)
- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [Red Hat Enterprise Linux on Amazon EC2 - FAQs](#)
- [Amazon EC2での設定](#)
- [Red Hat on Amazon Web Services](#)

4.1. AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーの作成

AWS CLI をインストールする前に、AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーを作成する必要があります。フェンシングおよびリソースエージェントの API は AWS アクセスキーおよびシークレットアクセスキーを使用してクラスター内の各ノードに接続します。

以下の手順に従って、キーを作成します。

前提条件

IAM ユーザーアカウントに Programmatic アクセスがある。詳細は、[「Setting up the AWS Environment」](#) を参照してください。

手順

1. [AWS コンソール](#) を起動します。
2. AWS アカウント ID をクリックしてドロップダウンメニューを表示し、**My Security Credentials** を選択します。
3. **Users** をクリックします。
4. ユーザーを選択し、**Summary** 画面を開きます。
5. **Security credentials** タブをクリックします。
6. **Create access key** をクリックします。
7. **.csv** ファイルをダウンロード (または両方の鍵を保存) します。フェンスデバイスの作成時に、この鍵を入力する必要があります。

4.2. AWS CLI のインストール

本章の多くの手順には、AWS CLI の使用が含まれます。AWS CLI をインストールするには、以下の手順を実行します。

前提条件

AWS アクセスキー ID および AWS シークレットアクセスキーを作成してアクセスできる。[情報および手順は、「AWS CLI の設定」](#)を参照してください。

手順

1. Python 3 および **pip** ツールをインストールします。

```
# yum install python3
# yum install python3-pip
```

2. **pip** コマンドを使用して、[AWS コマンドラインツール](#) をインストールします。

```
# pip3 install awscli
```

3. **aws --version** コマンドを実行して、AWS CLI をインストールしたことを確認します。

```
$ aws --version
aws-cli/1.16.182 Python/2.7.5 Linux/3.10.0-957.21.3.el7.x86_64 botocore/1.12.172
```

4. AWS アクセスの詳細に従って、AWS コマンドラインクライアントを設定します。

```
$ aws configure
AWS Access Key ID [None]:
AWS Secret Access Key [None]:
Default region name [None]:
Default output format [None]:
```

関連情報

- [AWS CLI の設定](#)
- [AWS コマンドラインツール](#)

4.3. HA EC2 インスタンスの作成

HA クラスターノードとして使用するインスタンスを作成するには、以下の手順を実施します。クラスターに使用する RHEL イメージを取得するオプションは複数あることに注意してください。AWS のイメージオプションに関する詳細は、「[AWS の Red Hat Enterprise Linux Image オプション](#)」を参照してください。

クラスターノードに使用するカスタムイメージを作成してアップロードするか、Gold Image (クラウドアクセスイメージ) またはオンデマンドイメージを選択できます。

前提条件

AWS 環境を設定する必要があります。詳細は「[Setting Up with Amazon EC2](#)」を参照してください。

手順

1. AWS EC2 Dashboard から、**Images** を選択して、**AMI** を選択します。
2. イメージを右クリックして、**Launch** を選択します。
3. ワークロードの要件を満たす、もしくは超過する **Instance Typ** を選択します。HA アプリケーションによっては、各インスタンスに高い容量を持たせる必要がある場合があります。

インスタンスタイプに関する情報は、「[Amazon EC2 Instance Types](#)」を参照してください。

1. **Next:Configure Instance Details** をクリックします。
 - a. クラスターを作成する **インスタンス数** を入力します。本章の例では、3つのクラスターノードを使用します。



注記

自動スケーリンググループでは起動しないでください。

- b. **ネットワーク** の場合は、「[Set up the AWS environment](#)」で作成した VPC を選択します。新規サブネットを作成するインスタンスのサブネットを選択します。
- c. 自動割り当てパブリック IP では、**Enable** を選択します。**Configure Instance Details** に必要な最小限の選択です。特定の HA アプリケーションによっては、追加の選択が必要になる場合があります。



注記

これらは、基本インスタンスの作成に必要な最小限の設定オプションです。HA アプリケーション要件に応じて追加オプションを確認します。

2. **Next: Add Storage** をクリックし、デフォルトのストレージが十分であることを確認します。HA アプリケーションに他のストレージオプションが必要でない限り、これらの設定を変更する必要はありません。
3. **Next: Add Tags** をクリックします。



注記

タグを使用すると、AWS リソースの管理に役立ちます。[タグ付けの詳細は、「Amazon EC2 リソースにタグを付ける」](#)を参照してください。

4. **Next:Configure Security Group** をクリックします。「[Setting up the AWS environment](#)」で作成した既存のセキュリティーグループを選択します。
5. **Review and Launch** をクリックし、選択を確認します。
6. **Launch** をクリックします。既存の鍵のペアの選択、または新しい鍵のペアの作成に関するダイアログが表示されます。[AWS 環境でのセットアップ時に作成した鍵のペア](#)を選択します。
7. **Launch Instances** をクリックします。
8. **View Instances** をクリックします。インスタンスに名前を付けることができます。



注記

または、AWS CLI を使用してインスタンスを起動することもできます。詳細は、Amazon [ドキュメントの「Launching, Listing, and Terminating Amazon EC2 Instances」](#)を参照してください。

関連情報

- [AWS マネジメントコンソール](#)
- [Amazon EC2での設定](#)
- [Amazon EC2 インスタンス](#)
- [Amazon EC2 インスタンスタイプ](#)

4.4. 秘密鍵の設定

SSH セッションで使用する前に、プライベート SSH キーファイル (**.pem**) を使用するには、以下の設定タスクを完了します。

手順

1. キーファイルを **Downloads** ディレクトリーから **ホーム** ディレクトリーまたは **~/.ssh ディレクトリー** に移動します。
2. 以下のコマンドを実行して、root ユーザーのみが読み取れるようにキーファイルのパーミッションを変更します。

```
# chmod 400 KeyName.pem
```

4.5. インスタンスへの接続

インスタンスに接続するには、すべてのノードで以下の手順を行います。

手順

1. [AWS コンソール](#) を起動し、[EC2 インスタンス](#) を選択します。
2. **Connect** をクリックし、**A standalone SSH client** を選択します。
3. SSH 端末セッションから、ポップアップウィンドウで提供される AWS の例を使用してインスタンスに接続します。パスが例に表示されていない場合は、正しいパスを **KeyName.pem** ファイルに追加します。

4.6. 高可用性パッケージおよびエージェントのインストール

全ノードで以下の手順を実行し、High Availability パッケージおよびエージェントをインストールします。

手順

1. 以下のコマンドを入力して、AWS Red Hat Update Infrastructure (RHUI) クライアントを削除します。Red Hat Cloud Access サブスクリプションを使用するため、サブスクリプションに加えて AWS RHUI を使用しないでください。

```
$ sudo -i
# yum -y remove rh-amazon-rhui-client*
```

2. 仮想マシンを Red Hat に登録します。

```
# subscription-manager register --auto-attach
```

3. すべてのリポジトリを無効にします。

```
# subscription-manager repos --disable=*
```

4. RHEL 8 Server リポジトリおよび RHEL 8 Server HA リポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-server-rpms
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-for-x86_64-highavailability-rpms
```

5. RHEL AWS インスタンスを更新します。

```
# yum update -y
```

6. Red Hat High Availability Add-On ソフトウェアパッケージと、使用可能なすべてのフェンスエージェントを、High Availability チャンネルからインストールします。

```
# yum install pcs pacemaker fence-agents-aws
```

7. **hacluster** ユーザーは、前の手順で **pcs** および **pacemaker** のインストール時に作成されました。すべてのクラスターノードに **hacluster** のパスワードを作成します。すべてのノードに同じパスワードを使用します。

```
# passwd hacluster
```

8. **firewalld.service** がインストールされている場合は、RHEL ファイアウォールに **高可用性** サービスを追加します。

■

```
# firewall-cmd --permanent --add-service=high-availability
# firewall-cmd --reload
```

9. **pcs** サービスを起動し、システムの起動時に開始できるようにします。

```
# systemctl start pcsd.service
# systemctl enable pcsd.service
```

10. **/etc/hosts** を編集し、RHEL ホスト名と内部 IP アドレスを追加します。詳細は、「[RHEL クラスタースターノードに /etc/hosts ファイルを設定する](#)」を参照してください。

検証手順

pcs サービスが実行していることを確認します。

```
# systemctl status pcsd.service

pcsd.service - PCS GUI and remote configuration interface
Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/pcsd.service; enabled; vendor preset: disabled)
Active: active (running) since Thu 2018-03-01 14:53:28 UTC; 28min ago
Docs: man:pcsd(8)
man:pcs(8)
Main PID: 5437 (pcsd)
CGroup: /system.slice/pcsd.service
└─5437 /usr/bin/ruby /usr/lib/pcsd/pcsd > /dev/null &
Mar 01 14:53:27 ip-10-0-0-48.ec2.internal systemd[1]: Starting PCS GUI and remote configuration interface...
Mar 01 14:53:28 ip-10-0-0-48.ec2.internal systemd[1]: Started PCS GUI and remote configuration interface.
```

4.7. クラスターの作成

ノードのクラスターを作成するには、以下の手順を実施します。

手順

1. ノードのいずれかで以下のコマンドを実行し、**pcs** ユーザー **hacluster** を認証します。コマンドで、クラスター内の各ノードの名前を指定します。

```
# pcs host auth hostname1 hostname2 hostname3
Username: hacluster
Password:
hostname1: Authorized
hostname2: Authorized
hostname3: Authorized
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs host auth node01 node02 node03
Username: hacluster
Password:
node01: Authorized
node02: Authorized
node03: Authorized
```


2. クラスターを作成します。

```
# pcs cluster setup cluster-name hostname1 hostname2 hostname3
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster setup --name newcluster node01 node02 node03
...omitted
Synchronizing pcsd certificates on nodes node01, node02, node03...
node02: Success
node03: Success
node01: Success
Restarting pcsd on the nodes in order to reload the certificates...
node02: Success
node03: Success
node01: Success
```

検証手順

1. クラスターを有効にします。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster enable --all
```

2. クラスターを起動します。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster start --all
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@node01 clouduser]# pcs cluster enable --all
node02: Cluster Enabled
node03: Cluster Enabled
node01: Cluster Enabled

[root@node01 clouduser]# pcs cluster start --all
node02: Starting Cluster...
node03: Starting Cluster...
node01: Starting Cluster...
```

4.8. フェンシングの設定

フェンシングを構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 以下の AWS メタデータクエリーを入力し、各ノードのインスタンス ID を取得します。フェンステデバイスを設定するには、これらの ID が必要です。詳細は、「[Instance Metadata and User Data](#)」を参照してください。

```
# echo $(curl -s http://169.254.169.254/latest/meta-data/instance-id)
```

例:

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# echo $(curl -s http://169.254.169.254/latest/meta-data/instance-id) i-07f1ac63af0ec0ac6
```

- 以下のコマンドを実行して、フェンスデバイスを設定します。**pcmk_host_map** コマンドを使用して、RHEL ホスト名をインスタンス ID にマッピングします。以前に設定した AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーを使用します。

```
# pcs stonith create name fence_aws access_key=access-key secret_key=secret-access-key region=region pcmk_host_map="rhel-hostname-1:Instance-ID-1;rhel-hostname-2:Instance-ID-2;rhel-hostname-3:Instance-ID-3" power_timeout=240 pcmk_reboot_timeout=480 pcmk_reboot_retries=4
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs stonith create clusterfence fence_aws access_key=AKIAI*****6MRMJA secret_key=a75EYIG4RVL3h*****K7koQ8dzaDyn5yolZ/region=us-east-1 pcmk_host_map="ip-10-0-0-48:i-07f1ac63af0ec0ac6;ip-10-0-0-46:i-063fc5fe93b4167b2;ip-10-0-0-58:i-08bd39eb03a6fd2c7" power_timeout=240 pcmk_reboot_timeout=480 pcmk_reboot_retries=4
```

- 他のノードのいずれかに対してフェンスエージェントをテストします。

```
# pcs stonith fence awsnodename
```



注記

コマンドの応答が表示されるまで数分かかる場合があります。フェンシングしているノードのアクティブな端末セッションを確認する場合は、fence コマンドを入力すると、端末の接続がすぐに終了するようになります。

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs stonith fence ip-10-0-0-58
Node: ip-10-0-0-58 fenced
```

検証手順

- ステータスを確認して、ノードがフェンスされていることを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs status
Cluster name: newcluster
Stack: corosync
Current DC: ip-10-0-0-46 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Mar 2 19:55:41 2018
Last change: Fri Mar 2 19:24:59 2018 by root via cibadmin on ip-10-0-0-46
```

```

3 nodes configured
1 resource configured

Online: [ ip-10-0-0-46 ip-10-0-0-48 ]
OFFLINE: [ ip-10-0-0-58 ]

Full list of resources:
clusterfence (stonith:fence_aws): Started ip-10-0-0-46

Daemon Status:
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled

```

2. 前の手順でフェンシングされたノードを起動します。

```
# pcs cluster start awshostname
```

3. ステータスを確認して、ノードが起動したことを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下ようになります。

```

[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs status
Cluster name: newcluster
Stack: corosync
Current DC: ip-10-0-0-46 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Mar 2 20:01:31 2018
Last change: Fri Mar 2 19:24:59 2018 by root via cibadmin on ip-10-0-0-48

3 nodes configured
1 resource configured

Online: [ ip-10-0-0-46 ip-10-0-0-48 ip-10-0-0-58 ]

Full list of resources:

clusterfence (stonith:fence_aws): Started ip-10-0-0-46

Daemon Status:
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled

```

4.9. クラスターノードへの AWS CLI のインストール

以前のバージョンでは、AWS CLI をホストシステムにインストールしていました。ネットワークリソースエージェントを設定する前に、クラスターノードに AWS CLI をインストールする必要があります。

各クラスターノードで以下の手順を実行します。

前提条件

AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーを作成している。詳細は、「[AWS アクセスキーおよび AWS シークレットアクセスキーの作成](#)」を参照してください。

手順

1. 「[AWS CLI のインストール](#)」の手順を行います。
2. 以下のコマンドを実行して、AWS CLI が適切に設定されていることを確認します。インスタンス ID およびインスタンス名が表示されます。たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# aws ec2 describe-instances --output text --query
'Reservations[*].Instances[*].[InstanceId,Tags[?Key==`Name`].Value]'
i-07f1ac63af0ec0ac6
ip-10-0-0-48
i-063fc5fe93b4167b2
ip-10-0-0-46
i-08bd39eb03a6fd2c7
ip-10-0-0-58
```

4.10. ネットワークリソースエージェントのインストール

HA 操作が機能するために、クラスターは AWS ネットワークリソースエージェントを使用してフェイルオーバー機能を有効にします。設定された時間内にノードがハートビートチェックに応答しない場合、ノードはフェンスされ、操作はクラスター内の追加のノードにフェイルオーバーします。これを使用するには、ネットワークリソースエージェントを設定する必要があります。

順序とコロケーションの制約を適用するため https://access.redhat.com/documentation/en-us/red_hat_enterprise_linux/7/html-single/high_availability_add-on_reference/#s1-resourcegroups-HAAR、同じグループに 2 つのリソースを追加します。

セカンダリープライベート IP リソースと仮想 IP リソースを作成

セカンダリープライベート IP アドレスを追加し、仮想 IP を作成するには、以下の手順を行います。この手順は、クラスター内の任意のノードから実行できます。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、**AWS Secondary Private IP Address** リソースエージェント (awsvip) の説明を表示します。これは、このエージェントのオプションとデフォルトの操作を示しています。

```
# pcs resource describe awsvip
```

2. 次のコマンドを実行して、**VPC CIDR** ブロックで未使用のプライベート IP アドレスを使用して 2 番目のプライベート IP アドレスを作成します。

```
# pcs resource create privip awsvip secondary_private_ip=Unused-IP-Address --group
group-name
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs resource create privip awsvip secondary_private_ip=10.0.0.68 --
group networking-group
```

-
- 3. 仮想 IP リソースを作成します。これは、フェンシングされたノードからフェイルオーバーノードに即時に再マッピングできる VPC IP アドレスで、サブネット内のフェンスされたノードの失敗をマスクします。

```
# pcs resource create vip IPAddr2 ip=secondary-private-IP --group group-name
```

たとえば、以下のようになります。

```
root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs resource create vip IPAddr2 ip=10.0.0.68 --group networking-group
```

検証手順

pcs status コマンドを実行して、リソースが実行していることを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# pcs status
Cluster name: newcluster
Stack: corosync
Current DC: ip-10-0-0-46 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Mar 2 22:34:24 2018
Last change: Fri Mar 2 22:14:58 2018 by root via cibadmin on ip-10-0-0-46

3 nodes configured
3 resources configured

Online: [ ip-10-0-0-46 ip-10-0-0-48 ip-10-0-0-58 ]

Full list of resources:

clusterfence (stonith:fence_aws): Started ip-10-0-0-46
Resource Group: networking-group
  privip (ocf::heartbeat:awsvip): Started ip-10-0-0-48
  vip (ocf::heartbeat:IPAddr2): Started ip-10-0-0-58

Daemon Status:
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled
```

Elastic IP アドレスの作成

Elastic IP アドレスは、フェンシングされたノードからフェイルオーバーノードに即時に再マッピングできるパブリック IP アドレスで、フェンスされたノードの障害をマスクします。

これは、先に作成した仮想 IP リソースとは異なることに注意してください。Elastic IP アドレスは、サブネット接続ではなく、公開用インターネット接続に使用されます。

1. 上で作成した [同じグループ](#) に 2 つのリソースを追加して、**順序** と **コロケーション** の制約を適用します。

2. 以下の AWS CLI コマンドを入力して、Elastic IP アドレスを作成します。

```
[root@ip-10-0-0-48 ~]# aws ec2 allocate-address --domain vpc --output text
eipalloc-4c4a2c45 vpc 35.169.153.122
```

3. 以下のコマンドを実行して、AWS のセカンダリー Elastic IP Address リソースエージェント (awseip) の説明を表示します。これは、このエージェントのオプションとデフォルトの操作を示しています。

```
# pcs resource describe awseip
```

4. ステップ1で作成して割り当てられた IP アドレスを使用して、セカンダリー Elastic IP アドレスリソースを作成します。

```
# pcs resource create elastic awseip elastic_ip=_Elastic-IP-Address_allocation_id=_Elastic-IP-Association-ID_ --group networking-group
```

たとえば、以下のようになります。

```
# pcs resource create elastic awseip elastic_ip=35.169.153.122 allocation_id=eipalloc-4c4a2c45 --group networking-group
```

検証手順

pcs status コマンドを実行して、リソースが実行していることを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@ip-10-0-0-58 ~]# pcs status
Cluster name: newcluster
Stack: corosync
Current DC: ip-10-0-0-58 (version 1.1.18-11.el7-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Mon Mar  5 16:27:55 2018
Last change: Mon Mar  5 15:57:51 2018 by root via cibadmin on ip-10-0-0-46
```

```
3 nodes configured
4 resources configured
```

```
Online: [ ip-10-0-0-46 ip-10-0-0-48 ip-10-0-0-58 ]
```

```
Full list of resources:
```

```
clusterfence (stonith:fence_aws): Started ip-10-0-0-46
Resource Group: networking-group
  privip (ocf::heartbeat:awsvip): Started ip-10-0-0-48
  vip (ocf::heartbeat:IPAddr2): Started ip-10-0-0-48
  elastic (ocf::heartbeat:awseip): Started ip-10-0-0-48
```

```
Daemon Status:
```

```
corosync: active/disabled
pacemaker: active/disabled
pcsd: active/enabled
```

Elastic IP アドレスのテスト

以下のコマンドを入力して、仮想 IP (awsvip) および Elastic IP (awseip) のリソースが機能していることを確認します。

手順

1. ローカルワークステーションから、上で作成した Elastic IP アドレスへの SSH セッションを開始します。

```
$ ssh -l ec2-user -i ~/.ssh/<KeyName>.pem elastic-IP
```

たとえば、以下のようになります。

```
$ ssh -l ec2-user -i ~/.ssh/cluster-admin.pem 35.169.153.122
```

2. SSH 経由で接続したホストが、作成された elastic リソースに関連付けられたホストであることを確認します。

関連情報

- [High Availability アドオンの概要](#)
- [「High Availability Add-On の管理」](#)
- [「High Availability Add-On リファレンス」](#)

4.11. 共有ブロックストレージの設定

このセクションでは、Amazon EBS のマルチアタッチボリュームを使用する Red Hat High Availability クラスターの共有ブロックストレージを設定するオプションの手順を説明します。この手順では、1TB 共有ディスクを持つ3つのインスタンス (3 ノードクラスター) を想定しています。

手順

1. AWS コマンド `create-volume` を使用して共有ブロックボリュームを作成します。

```
$ aws ec2 create-volume --availability-zone <availability_zone> --no-encrypted --size 1024 --volume-type io1 --iops 51200 --multi-attach-enabled
```

たとえば、以下のコマンドは、**us-east-1a** アベイラビリティゾーンにボリュームを作成します。

```
$ aws ec2 create-volume --availability-zone us-east-1a --no-encrypted --size 1024 --volume-type io1 --iops 51200 --multi-attach-enabled
```

```
{
  "AvailabilityZone": "us-east-1a",
  "CreateTime": "2020-08-27T19:16:42.000Z",
  "Encrypted": false,
  "Size": 1024,
  "SnapshotId": "",
  "State": "creating",
  "VolumeId": "vol-042a5652867304f09",
```

```
"Iops": 51200,
"Tags": [],
"VolumeType": "io1"
}
```



注記

次の手順で **Volumeld** が必要になります。

2. クラスターの各インスタンスについて、AWS コマンド `attach-volume` を使用して共有ブロックボリュームを割り当てます。<instance_id> および <volume_id> を使用します。

```
$ aws ec2 attach-volume --device /dev/xvdd --instance-id <instance_id> --volume-id
<volume_id>
```

たとえば、以下のコマンドは共有ブロックボリューム **vol-042a5652867304f09** を **instance i-0eb803361c2c887f2** に接続します。

```
$ aws ec2 attach-volume --device /dev/xvdd --instance-id i-0eb803361c2c887f2 --volume-id
vol-042a5652867304f09

{
  "AttachTime": "2020-08-27T19:26:16.086Z",
  "Device": "/dev/xvdd",
  "InstanceId": "i-0eb803361c2c887f2",
  "State": "attaching",
  "Volumeld": "vol-042a5652867304f09"
}
```

検証手順

1. クラスター内の各インスタンスについて、インスタンス <ip_address> で **SSH** コマンドを使用して、ブロックデバイスが利用できるようにされていることを確認します。

```
# ssh <ip_address> "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T '"
```

たとえば、以下のコマンドは、インスタンス IP **198.51.100.3** のホスト名およびブロックデバイスを含む詳細を一覧表示します。

```
# ssh 198.51.100.3 "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T '"

nodea
nvme2n1 259:1 0 1T 0 disk
```

2. **SSH** コマンドを使用して、クラスター内の各インスタンスが同じ共有ディスクを使用していることを確認します。

```
# ssh <ip_address> "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T ' | awk '{print \$1}' | xargs -i udevadm info
--query=all --name=/dev/{} | grep '^E: ID_SERIAL='"
```

たとえば、以下のコマンドは、インスタンス IP アドレス **198.51.100.3** のホスト名および共有ディスクボリューム ID が含まれる詳細を一覧表示します。


```
# ssh 198.51.100.3 "hostname ; lsblk -d | grep ' 1T ' | awk '{print \$1}' | xargs -i udevadm info  
--query=all --name=/dev/{} | grep '^E: ID_SERIAL='"
```

```
nodea
```

```
E: ID_SERIAL=Amazon Elastic Block Store_vol0fa5342e7aedef09f7
```

共有ディスクが各インスタンスに接続されていることを確認したら、クラスターの回復性の高いストレージを設定できます。Red Hat High Availability [クラスターに回復性の高いストレージを設定する方法](#)は、「[クラスターに GFS2 ファイルシステムを設定](#)」を参照してください。GFS2 ファイルシステムに関する一般的な情報は、「[GFS2 ファイルシステムの設定](#)」を参照してください。

第5章 GOOGLE CLOUD PLATFORM での GOOGLE COMPUTE ENGINE インスタンスとしての RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージのデプロイメント

Google Cloud Platform (GCP) に Google Compute Engine (GCE) インスタンスとして Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 8 イメージをデプロイするオプションは複数あります。本章では、イメージを選択するオプションを説明し、ホストシステムおよび仮想マシンのシステム要件の一覧を紹介합니다。本章では、ISO イメージからカスタム VM を作成し、GCE にアップロードして、インスタンスを起動する手順を説明します。

この章では、Google のドキュメントを参照している箇所が多数あります。多くの手順に関する詳細は、参照している Google ドキュメントを参照してください。



注記

GCP 向けの Red Hat [製品認定の一覧](#)は、「[Red Hat on Google Cloud Platform](#)」を参照してください。

前提条件

- 本章の手順を完了するには、Red Hat カスタマーポータルのアカウントが必要です。
- Google Cloud Platform コンソールにアクセスするために、GCP でアカウントを作成している。詳細は「[Google Cloud](#)」を参照してください。
- Red Hat [Cloud Access プログラム](#)で、Red Hat サブスクリプションを有効にしている。Red Hat Cloud Access プログラムでは、Red Hat のサブスクリプションを、物理システムまたはオンプレミスシステムから、Red Hat のフルサポートのある GCP へ移動できます。

関連情報

- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [Google Cloud](#)

5.1. GCP での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション

以下の表には、イメージの選択肢を記載し、イメージオプションの相違点を示しています。

表5.1 イメージオプション

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
-----------	-----------	----------	------

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
GCP に移動するカスタムイメージをデプロイすることを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラム を使用してサブスクリプションを有効にし、カスタムイメージをアップロードし、サブスクリプションを割り当てます。	その他のすべてのインスタンスコストを支払うこととなりますが、サブスクリプション自体には Red Hat 製品コストが含まれます。 GCP に移行するカスタムイメージは、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。
RHEL を含む既存の GCP イメージをデプロイすることを選択する	GCP イメージには、Red Hat 製品が含まれる	GCP Compute Engine でインスタンスを起動する時に RHEL イメージ を選択するか、 Google Cloud Platform Marketplace からイメージを選択します。	従量課金モデルでは、GCP に1時間ごとに支払います。このようなイメージは「オンデマンド」イメージと呼ばれています。GCP は、サポート契約に基づいてオンデマンドイメージのサポートを提供します。



重要

オンデマンドインスタンスは、Red Hat Cloud Access インスタンスに変換できません。オンデマンドイメージから Red Hat Cloud Access bring-your-own-subscription (BYOS) イメージに変更するには、Red Hat Cloud Access インスタンスを新たに作成し、オンデマンドインスタンスからデータを移行します。データを移行した後に、オンデマンドのインスタンスをキャンセルして二重請求を回避します。

本章の残りの部分には、カスタムイメージに関する情報および手順が記載されています。

関連情報

- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [「イメージ」](#)
- [Red Hat Cloud Access Reference Guide](#)
- [Creating an instance from a custom image](#)

5.2. ベースイメージの理解

本セクションでは、事前設定されたベースイメージおよびその設定を使用する方法を説明します。

5.2.1. カスタムベースイメージの使用

仮想マシンを手動で設定するには、ベース (スタートアップ) 仮想マシンイメージで開始します。ベース仮想マシンイメージを作成したら、構成設定を変更して、仮想マシンがクラウドで動作するために必要なパッケージを追加できます。イメージのアップロード後に、特定のアプリケーションに追加の設定変更を行うことができます。

関連情報

[Red Hat Enterprise Linux](#)

5.2.2. 仮想マシン構成設定

クラウド仮想マシンには、以下の構成設定が必要です。

表5.2 仮想マシンの構成設定

設定	推奨事項
ssh	仮想マシンへのリモートアクセスを確立するには、SSH を有効にする必要があります。
dhcp	プライマリ仮想アダプターは、dhcp 用に設定する必要があります。

5.3. ISO イメージからのベース仮想マシンの作成

このセクションの手順に従って、ISO イメージからベースイメージを作成します。

前提条件

Red Hat Enterprise Linux 8 [ホストマシンの仮想化を有効にします](#)。

5.3.1. ISO イメージのダウンロード

手順

1. Red Hat [カスタマーポータル](#)から最新の Red Hat Enterprise Linux ISO Image をダウンロードします。
2. イメージを `/var/lib/libvirt/images` に移動します。

5.3.2. ISO イメージからの仮想マシンの作成

手順

1. 仮想化用のホストマシンを有効にしていることを確認します。設定および手順は、「[RHEL 8 で仮想化を有効にする](#)」を参照してください。
2. 基本的な Red Hat Enterprise Linux 仮想マシンを作成し、起動します。手順は、「[仮想マシンの作成](#)」を参照してください。

- a. コマンドラインを使用して仮想マシンを作成する場合は、デフォルトのメモリーと CPU を仮想マシンの容量に設定するようにしてください。仮想ネットワークインターフェースを **virtio** に設定します。
基本的なコマンドラインの例を以下に示します。

```
virt-install --name isotest --memory 2048 --vcpus 2 --disk size=8,bus=virtio --location  
rhel-8.0-x86_64-dvd.iso --os-variant=rhel8.0
```

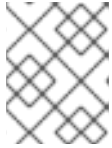
- b. Web コンソールを使用して仮想マシンを作成する場合は、「Web コンソールで仮想マシンの作成」の手順を行います。以下の点に注意してください。
 - **仮想マシンをすぐに起動** は選択しないでください。
 - **メモリー と ストレージのサイズ** を、希望の設定に変更します。
 - インストールを開始する前に、**仮想ネットワークインターフェース設定** で **モデル** を **virtio** に変更し、**vCPUs** を仮想マシンの容量設定に変更していることを確認します。

5.3.3. RHEL インストールの完了

仮想マシンが起動したら、以下の手順を実行してインストールを完了し、root アクセスを有効にします。

手順

1. インストールプロセス中に使用する言語を選択します。
2. **インストール概要** ビューで、以下を行います。
 - a. **ソフトウェアの選択** をクリックし、**最小インストール** を選択します。
 - b. **完了** をクリックします。
 - c. **インストール先** をクリックし、**ストレージ設定** で **カスタム** を選択します。
 - **/boot** で、500 MB 以上であることを確認してください。残りの領域は、**root /** に使用できます。
 - 標準のパーティションが推奨されますが、論理ボリューム管理 (LVM) を使用することも可能です。
 - ファイルシステムには、**xf**s、**ext4**、**ext3** などを使用できます。
 - 変更が完了したら、**完了** をクリックします。
3. **インストールの開始** をクリックします。
4. **Root パスワード** を設定します。必要に応じて、他のユーザーを作成します。
5. インストールが完了したら、仮想マシンを再起動して **root** でログインします。
6. イメージを設定します。



注記

cloud-init パッケージがインストールされ、有効になっていることを確認します。

7. 仮想マシンの電源をオフにします。

5.4. RHEL イメージの GCP へのアップロード

本セクションの手順に従って、イメージを GCP にアップロードします。

5.4.1. GCP での新規プロジェクトの作成

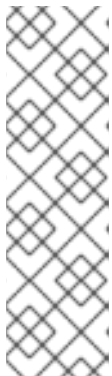
GCP で新規プロジェクトを作成するには、以下の手順を行います。

前提条件

GCP でアカウントを作成している。[作成していない場合は、Google Cloud](#) で詳細を参照してください。

手順

1. [GCP コンソール](#) を起動します。
2. [Google Cloud Platform](#) の右側にあるドロップダウンメニューをクリックします。
3. ポップアップメニューから [新しいプロジェクト](#) をクリックします。
4. [新しいプロジェクト](#) ウィンドウに、新規プロジェクトの名前を入力します。
5. [組織](#) を確認します。ドロップダウンメニューをクリックして、必要に応じて組織を変更します。
6. 親組織またはフォルダーの [場所](#) を確認します。[参照](#) をクリックして検索し、必要に応じてこの値を変更します。
7. [作成](#) をクリックして、新しい GCP プロジェクトを作成します。



注記

Google Cloud SDK をインストールしたら、CLI コマンドの **gcloud projects create** を使用してプロジェクトを作成できます。簡単な例を以下に示します。

```
gcloud projects create my-gcp-project3 --name project3
```

この例では、プロジェクト ID **my-gcp-project3** とプロジェクト名 **project3** のプロジェクトを作成します。[詳細は、「gcloud project create」](#) を参照してください。

関連情報

[リソースの作成と管理](#)

5.4.2. Google Cloud SDK のインストール

Google Cloud SDK をインストールするには、以下の手順を行います。

前提条件

- GCP でプロジェクトがない場合は、これを作成します。詳細は「[Google Cloud Platform でプロジェクトの新規作成](#)」を参照してください。
- ホストシステムに Python 2.7 が含まれることを確認します。そうでない場合は、Python 2.7 をインストールします。

手順

1. GCP の説明に従って、Google Cloud SDK アーカイブをダウンロードし、抽出します。詳細は、GCP [ドキュメントの「Quickstart for Linux」](#) を参照してください。
2. Google Cloud SDK の初期化と同じ手順に従います。



注記

Google Cloud SDK を初期化すると、**gcloud** CLI コマンドを使用してタスクを実行することができ、プロジェクトとインスタンスに関する情報を取得できます。たとえば、**gcloud compute project-info describe --project <project-name>** コマンドを使用してプロジェクト情報を表示できます。

関連情報

- [Linux 用のクイックスタート](#)
- [gcloud command reference](#)
- [gcloud コマンドライン ツールの概要](#)

5.4.3. Google Compute Engine の SSH 鍵の作成

以下の手順に従って、GCE で SSH 鍵を生成して登録し、そのパブリック IP アドレスを使用してインスタンスに直接 SSH 接続できるようにします。

手順

1. **ssh-keygen** コマンドを使用して、GCE で使用する SSH 鍵ペアを生成します。

```
# ssh-keygen -t rsa -f ~/.ssh/google_compute_engine
```

2. [GCP Console Dashboard ページ](#) から、Google Cloud Console バナーの左側にあるナビゲーションメニューをクリックし、Compute Engine を選択して Metadata を選択します。
3. SSH 鍵をクリックして、編集をクリックします。
4. `~/.ssh/google_compute_engine.pub` ファイルから生成された出力を入力し、保存をクリックします。
これで、標準の SSH を使用してインスタンスに接続できます。

```
# ssh -i ~/.ssh/google_compute_engine <username>@<instance_external_ip>
```



注記

`gcloud compute config-ssh` コマンドを実行すると、インスタンスのエイリアスを設定ファイルに追加できます。エイリアスは、インスタンス名による単純な SSH 接続を許可します。[gcloud compute config-ssh コマンドの詳細は、「gcloud compute config-ssh」を参照してください。](#)

関連情報

- [gcloud compute config-ssh](#)
- [インスタンスへの接続](#)

5.4.4. GCP ストレージでのストレージバケットの作成

GCP にインポートするには、GCP Storage バケットが必要です。以下の手順に従って、バケットを作成します。

手順

1. GCP にログインしていない場合は、次のコマンドを実行してログインします。

```
# gcloud auth login
```

2. ストレージバケットを作成します。

```
# gsutil mb gs://bucket_name
```



注記

Google Cloud コンソールを使用してバケットを作成することもできます。[詳細は、「バケットの作成」を参照してください。](#)

関連情報

[バケットの作成](#)

5.4.5. GCP バケットへのイメージの変換およびアップロード

以下の手順に従って、GCP バケットにイメージを変換してアップロードします。サンプルは典型的なものです。`qcow2` イメージを `raw` 形式に変換してから、そのイメージをアップロードするために `tar` を使用します。

手順

1. `qemu-img` コマンドを実行してイメージを変換します。変換されたイメージは、`disk.raw` という名前になるはずですが。

```
# qemu-img convert -f qcow2 -O raw rhel-8.2-sample.qcow2 disk.raw
```

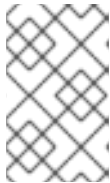
2. イメージに `tar` コマンドを実行します。

```
# tar --format=oldgnu -Sczf disk.raw.tar.gz disk.raw
```


3. そのイメージを、以前作成したバケットにアップロードします。アップロードには数分かかる場合があります。

```
# gsutil cp disk.raw.tar.gz gs://bucket_name
```

4. Google Cloud Platform のホーム画面で、折りたたまれたメニューアイコンをクリックし、ストレージを選択してからブラウザーを選択します。
5. バケットの名前をクリックします。
バケット名の下に、tar コマンドを実行したイメージが表示されます。



注記

GCP コンソールを使用してイメージをアップロードすることもできます。これを行うには、バケットの名前をクリックしてからファイルのアップロードをクリックします。

関連情報

- [仮想ディスクの手動インポート](#)
- [インポート方法の選択](#)

5.4.6. GCP バケットのオブジェクトからイメージの作成

以下の手順に従って、GCP バケットのオブジェクトからイメージを作成します。

手順

1. 以下のコマンドを実行して GCE のイメージを作成します。作成するイメージの名前、バケット名、および tar コマンドを実行したイメージの名前を指定します。

```
# gcloud compute images create my-image-name --source-uri gs://my-bucket-name/disk.raw.tar.gz
```



注記

または、Google Cloud コンソールを使用して、イメージを作成することもできます。詳細は、[「カスタムイメージの作成、削除、使用中止」](#)を参照してください。

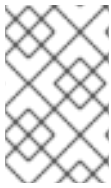
2. 必要に応じて、GCP コンソールでイメージを検索します。
 - a. Google Cloud Console バナーの左側にあるナビゲーションメニューをクリックします。
 - b. Compute Engine を選択し、イメージを選択します。

関連情報

- [カスタムイメージの作成、削除、使用中止](#)
- [gcloud compute images create](#)

5.4.7. イメージからの Google Compute Engine インスタンスの作成

GCP コンソールを使用して GCE 仮想マシンインスタンスを設定するには、以下の手順を行います。



注記

以下の手順では、GCP コンソールを使用して基本的な仮想マシンインスタンスを作成する方法を説明します。GCE [仮想マシンインスタンスおよびその設定オプションの詳細](#)は、「[VM インスタンスの作成と起動](#)」を参照してください。

手順

1. [GCP Console Dashboard ページ](#) から、Google Cloud Console バナーの左側にあるナビゲーションメニューをクリックし、Compute Engine を選択してイメージを選択します。
2. イメージを選択します。
3. インスタンスの作成 をクリックします。
4. インスタンスの作成 ページで、インスタンスの名前 を入力します。
5. 地域 とゾーン を選択します。
6. ワークロードの要件を満たすか、それを超える マシン設定 を選択します。
7. ブートディスク にイメージ名が指定されていることを確認します。
8. 必要に応じて、ファイアウォール で HTTP トラフィックを許可する か、HTTPS トラフィックを許可する を選択します。
9. 作成 をクリックします。



注記

これらは、基本インスタンスの作成に必要な最小限の設定オプションです。アプリケーション要件に応じて追加オプションを確認します。

10. VM インスタンスにあるイメージを見つけます。
11. GCP Console Dashboard から、Google の Cloud Console バナーの左側にあるナビゲーションメニューをクリックし、Compute Engine を選択してから仮想マシンインスタンスを選択します。



注記

または、CLI コマンド `gcloud compute instances create` を使用して、イメージから GCE 仮想マシンインスタンスを作成することもできます。簡単な例を以下に示します。

```
gcloud compute instances create myinstance3 --zone=us-central1-a --image test-iso2-image
```

この例では、既存のイメージ `test-iso2-image` に基づいて、ゾーン `us-central1-a` に `myinstance3` という名前の仮想マシンインスタンスを作成します。[詳細は、「`gcloud compute instances create`」](#)を参照してください。

5.4.8. インスタンスへの接続

以下の手順に従って、そのパブリック IP アドレスを使用して GCE インスタンスに接続します。

手順

1. 次のコマンドを実行して、インスタンスが実行されていることを確認します。このコマンドは、インスタンスが実行しているかどうかを示し、実行している場合は実行中のインスタンスのパブリック IP アドレスなど、GCE インスタンスに関する情報一覧を表示します。

```
# gcloud compute instances list
```

2. 標準の SSH を使用してインスタンスに接続します。この例では、上述の手順で作成した `google_compute_engine` キーを使用します。

```
# ssh -i ~/.ssh/google_compute_engine <user_name>@<instance_external_ip>
```



注記

GCP は、インスタンスに対して SSH を多数実行する方法を提供します。[詳細は、「Connecting to instances」を参照してください。](#)以前に設定した root アカウントおよびパスワードを使用して、インスタンスに接続することもできます。

関連情報

- [gcloud compute instances list](#)
- [インスタンスへの接続](#)

5.4.9. Red Hat サブスクリプションの割り当て

Red Hat Cloud Access プログラムで有効になっているサブスクリプションを割り当てるには、以下の手順を行います。

前提条件

サブスクリプションが有効になっている。

手順

1. システムを登録します。

```
subscription-manager register --auto-attach
```

2. サブスクリプションを割り当てます。

- アクティベーションキーを使用して、サブスクリプションを割り当てることができます。[詳細は、「カスタマーポータルでのアクティベーションキーを作成する」を参照してください。](#)
- または、サブスクリプションプール (Pool ID) の ID を使用してサブスクリプションを手動で割り当てることができます。[「コマンドラインでのサブスクリプションのアタッチと削除」を参照してください。](#)

関連情報

- [カスタマーポータルでのアクティベーションキーを作成する](#)
- [コマンドラインでのサブスクリプションのタッチと削除](#)
- [Red Hat Subscription Manager の使用および設定](#)

第6章 GOOGLE CLOUD PLATFORM での RED HAT HIGH AVAILABILITY クラスターの設定

本章では、Google Compute Engine (GCE) 仮想マシンインスタンスをクラスターノードとして使用して、Google Cloud Platform (GCP) に Red Hat High Availability (HA) クラスターを設定する情報および手順を説明します。

本章には、GCP の環境を設定するための前提条件の手順が含まれています。環境を設定したら、仮想マシンインスタンスを作成および設定できます。

本章では、個別のノードを GCP の HA ノードのクラスターに変換する HA クラスターの作成に固有の手順も説明します。これには、各クラスターノードに高可用性パッケージおよびエージェントをインストールし、フェンシングを設定し、ネットワークリソースエージェントをインストールする手順が含まれます。

前提条件

- [Red Hat Cloud Access プログラム](#) に登録し、未使用の RHEL サブスクリプションがある。割り当てられたサブスクリプションには、各 GCP インスタンスの以下のリポジトリへのアクセスが含まれている必要があります。
 - Red Hat Enterprise Linux 8 Server: `rhel-8-server-rpms/8Server/x86_64`
 - Red Hat Enterprise Linux 8 Server (High Availability): `rhel-8-server-ha-rpms/8Server/x86_64`
- アクティブな GCP プロジェクトに属し、プロジェクトでリソースを作成するのに十分なパーミッションを持っている必要があります。
- プロジェクトには、個別ユーザーではなく、仮想マシンインスタンスに属するサービスアカウントが必要です。別のサービスアカウントを作成する代わりに、デフォルトのサービスアカウントを使用する方法は、「[Using the Compute Engine Default Service Account](#)」を参照してください。

またはプロジェクト管理者がカスタムサービスアカウントを作成する場合、サービスアカウントは以下のロールに設定する必要があります。

- クラウドトレースエージェント
- コンピュート管理者
- コンピュートネットワーク管理者
- クラウドデータベースユーザー
- ロギング管理者
- 監視エディター
- 監視メトリックライター
- サービスアカウント管理者
- ストレージ管理者

関連情報

- [Support Policies for RHEL High Availability clusters - Transport Protocols](#)
- [VPC network overview](#)
- [Exploring RHEL High Availability's Components, Concepts, and Features - Overview of Transport Protocols](#)
- [Design Guidance for RHEL High Availability Clusters - Selecting the Transport Protocol](#)

6.1. 必要なシステムパッケージ

本章の手順では、Red Hat Enterprise Linux を実行しているホストシステムを使用していることを前提としています。この手順を正常に行うには、ホストシステムに以下のパッケージをインストールする必要があります。

表6.1 システムパッケージ

パッケージ	リポジトリ	説明
libvirt	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	プラットフォーム仮想化を管理するためのオープンソース API、デーモン、および管理ツール
virt-install	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンを構築するためのコマンドラインユーティリティー
libguestfs	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシンファイルシステムにアクセスして変更するためのライブラリー
libguestfs-tools	rhel-8-for-x86_64-appstream-rpms	仮想マシン用のシステム管理ツール (guestfish ユーティリティーを含む)

6.2. GCP での RED HAT ENTERPRISE LINUX イメージオプション

以下の表には、イメージの選択肢を記載し、イメージオプションの相違点を示しています。

表6.2 イメージオプション

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
-----------	-----------	----------	------

イメージオプション	サブスクリプション	サンプルシナリオ	留意事項
GCP に移動するカスタムイメージをデプロイすることを選択する	既存の Red Hat サブスクリプションを活用する	Red Hat Cloud Access プログラム を使用して サブスクリプションを有効にし 、カスタムイメージをアップロードし、サブスクリプションを割り当てます。	その他のすべてのインスタンスコストを支払うこととなりますが、サブスクリプション自体には Red Hat 製品コストが含まれます。 GCP に移行するカスタムイメージは、既存の Red Hat サブスクリプションを活用するため、「クラウドアクセス」イメージと呼ばれています。Red Hat は、クラウドアクセスイメージを直接サポートします。
RHEL を含む既存の GCP イメージをデプロイすることを選択する	GCP イメージには、Red Hat 製品が含まれる	GCP Compute Engine でインスタンスを起動する時に RHEL イメージを選択するか 、 Google Cloud Platform Marketplace からイメージを選択します。	従量課金モデルでは、GCP に1時間ごとに支払います。このようなイメージは「オンデマンド」イメージと呼ばれています。GCP は、サポート契約に基づいてオンデマンドイメージのサポートを提供します。



重要

オンデマンドインスタンスは、Red Hat Cloud Access インスタンスに変換できません。オンデマンドイメージから Red Hat Cloud Access bring-your-own-subscription (BYOS) イメージに変更するには、Red Hat Cloud Access インスタンスを新たに作成し、オンデマンドインスタンスからデータを移行します。データを移行した後に、オンデマンドのインスタンスをキャンセルして二重請求を回避します。

本章の残りの部分には、カスタムイメージに関する情報および手順が記載されています。

関連情報

- [Red Hat in the Public Cloud](#)
- [「イメージ」](#)
- [Red Hat Cloud Access Reference Guide](#)
- [Creating an instance from a custom image](#)

6.3. GOOGLE CLOUD SDK のインストール

Google Cloud SDK をインストールするには、以下の手順を行います。

前提条件

- GCP でプロジェクトがない場合は、これを作成します。詳細は「[Google Cloud Platform でプロジェクトの新規作成](#)」を参照してください。
- ホストシステムに Python 2.7 が含まれることを確認します。そうでない場合は、Python 2.7 をインストールします。

手順

1. GCP の説明に従って、Google Cloud SDK アーカイブをダウンロードし、抽出します。詳細は、GCP [ドキュメントの「Quickstart for Linux」](#) を参照してください。
2. Google Cloud SDK の初期化と同じ手順に従います。



注記

Google Cloud SDK を初期化すると、`gcloud` CLI コマンドを使用してタスクを実行することができ、プロジェクトとインスタンスに関する情報を取得できます。たとえば、`gcloud compute project-info describe --project <project-name>` コマンドを使用してプロジェクト情報を表示できます。

関連情報

- [Linux 用のクイックスタート](#)
- [gcloud command reference](#)
- [gcloud コマンドライン ツールの概要](#)

6.4. GCP イメージバケットの作成

以下のドキュメントには、デフォルトの場所に複数のリージョンバケットを作成する最小要件が記載されています。

前提条件

GCP ストレージユーティリティ (gsutil)

手順

1. Google Cloud Platform にログインしていない場合は、次のコマンドを実行してログインします。

```
# gcloud auth login
```

2. ストレージバケットを作成します。

```
$ gsutil mb gs://BucketName
```

たとえば、以下ようになります。

```
$ gsutil mb gs://rhel-ha-bucket
```


関連情報

Make buckets

6.5. カスタムの仮想プライベートクラウドネットワークおよびサブネットの作成

カスタム仮想プライベートクラウド (VPC) ネットワークおよびサブネットを作成するには、以下の手順を行います。

手順

1. GCP コンソールを起動します。
2. 左側のナビゲーションペインで Networking の下にある VPC ネットワーク を選択します。
3. VPC ネットワークの作成 をクリックします。
4. VPC ネットワークの名前を入力します。
5. 新規サブネット で、クラスターを作成するリージョンにカスタムサブネット を作成します。
6. 作成 をクリックします。

6.6. ベース GCP イメージの準備およびインポート

GCP のイメージを準備するには、以下の手順を行います。

手順

1. 以下のコマンドを実行してファイルを変換します。GCP にアップロードしたイメージは raw 形式であり、disk.raw という名前である必要があります。

```
$ qemu-img convert -f qcow2 ImageName.qcow2 -O raw disk.raw
```

2. 以下のコマンドを実行して、raw ファイルを圧縮します。GCP にアップロードしたイメージを圧縮する必要があります。

```
$ tar -Sczf ImageName.tar.gz disk.raw
```

3. 圧縮されたイメージを先に作成したバケットにインポートします。

```
$ gsutil cp ImageName.tar.gz gs://BucketName
```

6.7. ベース GCP インスタンスの作成および設定

GCP の操作およびセキュリティ要件に準拠する GCP インスタンスを作成して設定するには、以下の手順を実施します。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、バケットの圧縮ファイルからイメージを作成します。

```
$ gcloud compute images create BaselImageName --source-uri
gs://BucketName/BaselImageName.tar.gz
```

たとえば、以下のようになります。

```
[admin@localhost ~] $ gcloud compute images create rhel-76-server --source-uri gs://user-
rhelha/rhel-server-76.tar.gz
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/MyProject/global/images/rhel-
server-76].
NAME          PROJECT          FAMILY DEPRECATED STATUS
rhel-76-server rhel-ha-testing-on-gcp          READY
```

2. 以下のコマンドを入力して、イメージからテンプレートインスタンスを作成します。ベース RHEL インスタンスに必要な最小サイズは n1-standard-2 です。追加の設定オプションは、「[gcloud compute instances create](#)」を参照してください。

```
$ gcloud compute instances create BaselInstanceName --can-ip-forward --machine-
type n1-standard-2 --image BaselImageName --service-account ServiceAccountEmail
```

例:

```
[admin@localhost ~] $ gcloud compute instances create rhel-76-server-base-instance --can-
ip-forward --machine-type n1-standard-2 --image rhel-76-server --service-account
account@project-name-on-gcp.iam.gserviceaccount.com
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/rhel-ha-testing-on-gcp/zones/us-
east1-b/instances/rhel-76-server-base-instance].
NAME ZONE MACHINE_TYPE PREEMPTIBLE INTERNAL_IP EXTERNAL_IP
STATUS
rhel-76-server-base-instance us-east1-bn1-standard-2 10.10.10.3 192.227.54.211
RUNNING
```

3. SSH 端末セッションでインスタンスに接続します。

```
$ ssh root@PublicIPaddress
```

4. RHEL ソフトウェアを更新します。

- a. Red Hat Subscription Manager (RHSM) に登録します。
- b. サブスクリプションプール ID を有効にします (または `--auto-attach` コマンドを使用しま
す)。
- c. すべてのリポジトリを無効にします。

```
# subscription-manager repos --disable=*
```

- d. 以下のリポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-server-rpms
```

- e. `yum update` コマンドを実行します。

```
# yum update -y
```

5. 実行中のインスタンスに GCP Linux ゲスト環境をインストールします (インプレースインストール)。
手順は、「[Install the guest environment in-place](#)」を参照してください。
6. CentOS/RHEL オプションを選択します。
7. コマンドスクリプトをコピーして、コマンドプロンプトに貼り付けて、スクリプトを即座に実行します。
8. インスタンスに以下の設定変更を行います。これらの変更は、カスタムイメージの GCP の推奨事項に基づいています。詳細は、「[gcloudcompute images list](#)」を参照してください。

- a. `/etc/chrony.conf` ファイルを編集し、すべての NTP サーバーを削除します。

- b. 以下の NTP サーバーを追加します。

```
metadata.google.internal iburst Google NTP server
```

- c. 永続的なネットワークデバイスルールを削除します。

```
# rm -f /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
# rm -f /etc/udev/rules.d/75-persistent-net-generator.rules
```

- d. ネットワークサービスが自動的に開始するように設定します。

```
# chkconfig network on
```

- e. **sshd service** が自動的に起動するように設定します。

```
# systemctl enable sshd
# systemctl is-enabled sshd
```

- f. 以下のコマンドを実行してタイムゾーンを UTC に設定します。

```
# ln -sf /usr/share/zoneinfo/UTC /etc/localtime
```

- g. (必要に応じて) `/etc/ssh/ssh_config` ファイルを編集し、以下の行をファイルの最後に追加します。これにより、アクティブでない期間に SSH セッションが維持されます。

```
# Server times out connections after several minutes of inactivity.
# Keep alive ssh connections by sending a packet every 7 minutes.
ServerAliveInterval 420
```

- h. `/etc/ssh/sshd_config` ファイルを編集し、必要に応じて以下の変更を加えます。ClientAliveInterval 420 設定は任意です。これにより、アクティブではない期間が長くなると SSH セッションが維持されます。

```
PermitRootLogin no
PasswordAuthentication no
AllowTcpForwarding yes
X11Forwarding no
PermitTunnel no
```

```
# Compute times out connections after 10 minutes of inactivity.
# Keep ssh connections alive by sending a packet every 7 minutes.
ClientAliveInterval 420
```

- パスワードアクセスを無効にするには、以下のコマンドを実行します。/etc/cloud/cloud.cfg ファイルを編集します。

```
ssh_pwauth from 1 to 0.
ssh_pwauth: 0
```



重要

以前は、SSH セッションアクセスを許可するパスワードアクセスを有効にして、インスタンスを設定していました。パスワードアクセスを無効にする必要があります。すべての SSH セッションアクセスはパスワードなしにする必要があります。

- 以下のコマンドを入力して、サブスクリプションマネージャーからインスタンスの登録を解除します。

```
# subscription-manager unregister
```

- 以下のコマンドを実行してシェル履歴を消去します。次の手順でインスタンスを実行した状態にします。

```
# export HISTSIZE=0
```

6.8. スナップショットイメージの作成

インスタンスの設定を保存し、スナップショットを作成するには、以下の手順を行います。

手順

- 実行中のインスタンスで以下のコマンドを入力し、データをディスクに同期します。

```
# sync
```

- ホストシステムで次のコマンドを実行し、スナップショットを作成します。

```
$ gcloud compute disks snapshot InstanceName --snapshot-names SnapshotName
```

- ホストシステムで次のコマンドを実行し、スナップショットから設定済みのイメージを作成します。

```
$ gcloud compute images create ConfiguredImageFromSnapshot --source-snapshot SnapshotName
```

関連情報

[Creating Persistent Disk Snapshots](#)

6.9. HA ノードテンプレートインスタンスおよび HA ノードの作成

スナップショットからイメージを設定したら、ノードテンプレートを作成できます。このテンプレートを使用してすべての HA ノードを作成します。テンプレートおよび HA ノードを作成するには、以下の手順を行います。

手順

1. 次のコマンドを実行して、インスタステンプレートを作成します。

```
$ gcloud compute instance-templates create InstanceTemplateName --can-ip-forward -
-machine-type n1-standard-2 --image ConfiguredImageFromSnapshot --service-
account ServiceAccountEmailAddress
```

たとえば、以下のようになります。

```
[admin@localhost ~] $ gcloud compute instance-templates create rhel-81-instance-
template --can-ip-forward --machine-type n1-standard-2 --image rhel-81-gcp-image --
service-account account@project-name-on-gcp.iam.gserviceaccount.com
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/project-name-on-
gcp/global/instanceTemplates/rhel-81-instance-template].
NAME MACHINE_TYPE PREEMPTIBLE CREATION_TIMESTAMP
rhel-81-instance-template n1-standard-2 2018-07-25T11:09:30.506-07:00
```

2. 次のコマンドを実行して、複数のノードを1つのゾーンに作成します。

```
# gcloud compute instances create NodeName01 NodeName02 --source-instance-
template InstanceTemplateName --zone RegionZone --network=NetworkName --
subnet=SubnetName
```

たとえば、以下のようになります。

```
[admin@localhost ~] $ gcloud compute instances create rhel81-node-01 rhel81-node-
02 rhel81-node-03 --source-instance-template rhel-81-instance-template --zone us-
west1-b --network=projectVPC --subnet=range0
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/project-name-on-
gcp/zones/us-west1-b/instances/rhel81-node-01].
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/project-name-on-
gcp/zones/us-west1-b/instances/rhel81-node-02].
Created [https://www.googleapis.com/compute/v1/projects/project-name-on-
gcp/zones/us-west1-b/instances/rhel81-node-03].
NAME      ZONE      MACHINE_TYPE  PREEMPTIBLE  INTERNAL_IP
EXTERNAL_IP  STATUS
rhel81-node-01 us-west1-b n1-standard-2      10.10.10.4  192.230.25.81
RUNNING
rhel81-node-02 us-west1-b n1-standard-2      10.10.10.5  192.230.81.253
RUNNING
rhel81-node-03 us-east1-b n1-standard-2      10.10.10.6  192.230.102.15
RUNNING
```

6.10. HA パッケージおよびエージェントのインストール

すべてのノードで以下の手順を実行します。

手順

1. Google Cloud コンソールで Compute Engine を選択し、VM instance を選択します。
2. インスタンスを選択し、SSH の横にある矢印をクリックして、gcloud コマンドオプションの表示を選択します。
3. インスタンスへのパスワードなしアクセスのために、コマンドプロンプトでこのコマンドを貼り付けます。
4. `sudo` アカウントアクセスを有効にし、Red Hat Subscription Manager に登録します。
5. サブスクリプションプール ID を有効にします (または `--auto-attach` コマンドを使用します)。
6. すべてのリポジトリを無効にします。

```
# subscription-manager repos --disable=*
```

7. 以下のリポジトリを有効にします。

```
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-server-rpms  
# subscription-manager repos --enable=rhel-8-for-x86_64-highavailability-rpms
```

8. **pcs pacemaker**、フェンスエージェント、およびリソースエージェントをインストールします。

```
# yum install -y pcs pacemaker fence-agents-gce resource-agents-gcp
```

9. すべてのパッケージを更新します。

```
# yum update -y
```

6.11. HA サービスの設定

全ノードで以下の手順を実行し、HA サービスを設定します。

手順

1. **hacluster** ユーザーは、前の手順で **pcs** および **pacemaker** のインストール時に作成されました。すべてのクラスターノードに **hacluster** ユーザーのパスワードを作成します。すべてのノードに同じパスワードを使用します。

```
# passwd hacluster
```

2. **firewalld** サービスがインストールされている場合は、次のコマンドを実行して HA サービスを追加します。

```
# firewall-cmd --permanent --add-service=high-availability
```

```
# firewall-cmd --reload
```

3. 次のコマンドを実行して **pcs** サービスを開始し、システムの起動時に開始できるようにします。

```
# systemctl start pcsd.service

# systemctl enable pcsd.service

Created symlink from /etc/systemd/system/multi-user.target.wants/pcsd.service to
/usr/lib/systemd/system/pcsd.service.
```

検証手順

1. **pcsd サービスが実行していることを確認します。**

```
# systemctl status pcsd.service

pcsd.service - PCS GUI and remote configuration interface
Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/pcsd.service; enabled; vendor preset: disabled)
Active: active (running) since Mon 2018-06-25 19:21:42 UTC; 15s ago
Docs: man:pcsd(8)
      man:pcs(8)
Main PID: 5901 (pcsd)
CGroup: /system.slice/pcsd.service
        └─5901 /usr/bin/ruby /usr/lib/pcsd/pcsd > /dev/null &
```

2. **/etc/hosts** ファイルを編集します。すべてのノードに RHEL ホスト名と内部 IP アドレスを追加します。

関連情報

[RHEL クラスターノードに /etc/hosts ファイルを設定する](#)

6.12. クラスターの作成

ノードのクラスターを作成するには、以下の手順を実施します。

手順

1. ノードのいずれかで次のコマンドを実行し、pcs ユーザーを認証します。コマンドのクラスター内の各ノードの名前を指定します。

```
# pcs host auth hostname1 hostname2 hostname3
Username: hacluster
Password:
hostname1: Authorized
hostname2: Authorized
hostname3: Authorized
```

2. 次のコマンドを実行してクラスターを作成します。

```
# pcs cluster setup cluster-name hostname1 hostname2 _hostname3-
```

検証手順

1. 以下のコマンドを実行して、起動時にノードが自動的にクラスターに参加できるようにします。

-

```
# pcs cluster enable --all
```

2. 以下のコマンドを実行してクラスターを開始します。

```
# pcs cluster start --all
```

6.13. フェンスデバイスの作成

ほとんどのデフォルト設定では、GCP インスタンス名と RHEL ホスト名は同じです。

フェンスデバイスを作成するには、以下の手順を実施します。

手順

1. 次のコマンドを実行して、GCP インスタンス名を取得します。出力には、インスタンスの内部 ID も表示されることに注意してください。

```
# fence_gce --zone us-west1-b --project=rhel-ha-on-gcp -o list
```

たとえば、以下のようになります。

```
Example:
[root@rhel81-node-01 ~]# fence_gce --zone us-west1-b --project=rhel-ha-testing-on-gcp -o
list
44358*****3181,InstanceName-3
40819*****6811,InstanceName-1
71736*****3341,InstanceName-2
```

2. 次のコマンドを実行して、フェンスデバイスを作成します。

```
# pcs stonith create _FenceDeviceName_ fence_gce zone=_Region-Zone_
project=_MyProject_
```

検証手順

フェンスデバイスが起動していることを確認します。

```
# pcs status
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs status
Cluster name: gcp-cluster
Stack: corosync
Current DC: rhel81-node-02 (version 1.1.18-11.el7_5.3-2b07d5c5a9) - partition with quorum
Last updated: Fri Jul 27 12:53:25 2018
Last change: Fri Jul 27 12:51:43 2018 by root via cibadmin on rhel81-node-01

3 nodes configured
3 resources configured

Online: [ rhel81-node-01 rhel81-node-02 rhel81-node-03 ]
```


Full list of resources:

```
us-west1-b-fence (stonith:fence_gce): Started rhel81-node-01
```

Daemon Status:

```
corosync: active/enabled
```

```
pacemaker: active/enabled
```

```
pcsd: active/enabled
```

6.14. GCP ノードの承認の設定

アカウント認証情報を使用して GCP にアクセスするようにクラウドの SDK ツールを設定します。

手順

各ノードで次のコマンドを実行し、プロジェクト ID およびアカウントの認証情報で各ノードを初期化します。

```
# gcloud-ra init
```

6.15. GCP-VCP-MOVE-VIP リソースエージェントの設定

gcp-vpc-move-vip リソースエージェントは、セカンダリー IP アドレス (エイリアス IP) を実行中のインスタンスに割り当てます。これは、クラスター内の異なるノード間で渡すことのできるフローティング IP アドレスです。

以下のコマンドを実行して、このリソースの詳細情報を表示します。

```
# pcs resource describe gcp-vpc-move-vip
```

リソースエージェントを、プライマリーサブネットアドレス範囲またはセカンダリーサブネットアドレス範囲を使用するように設定できます。本セクションでは、両方の範囲の手順を説明します。

プライマリーサブネットアドレス範囲

プライマリー VPC サブネットのリソースを設定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 次のコマンドを実行して **aliasip** リソースを作成します。未使用の内部 IP アドレスを含めません。コマンドに CIDR ブロックを含めます。

```
# pcs resource create aliasip gcp-vpc-move-vip alias_ip=UnusedIPAddress/CIDRblock
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource create aliasip gcp-vpc-move-vip
alias_ip=10.10.10.200/32
```

2. 以下のコマンドを実行して、ノードで IP を管理する **IPAddr2** リソースを作成します。

```
# pcs resource create vip IPAddr2 nic=interface ip=AliasIPAddress cidr_netmask=32
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource create vip IPAddr2 nic=eth0 ip=10.10.10.200  
cidr_netmask=32
```

3. **vipgrp** でネットワークリソースをグループ化するには、次のコマンドを実行します。

```
# pcs resource group add vipgrp aliasip vip
```

検証手順

1. 次のコマンドを実行して、リソースが起動し、**vipgrp** の下でグループ化されていることを確認します。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs status
```

2. 次のコマンドを実行して、リソースが別のノードに移動できることを確認します。

```
# pcs resource move vip _Node_
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource move vip rhel81-node-03
```

3. 次のコマンドを実行して、**vip** が別のノードで正常に起動することを確認します。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs status
```

セカンダリーサブネットアドレス範囲

セカンダリーサブネットアドレス範囲のリソースを設定するには、以下の手順を実施します。

前提条件

[カスタムネットワークおよびサブネットを作成している。](#)

手順

1. 次のコマンドを実行して、セカンダリーサブネットアドレス範囲を作成します。

```
# gcloud-ra compute networks subnets update SubnetName --region RegionName --  
add-secondary-ranges SecondarySubnetName=SecondarySubnetRange
```

たとえば、以下のようになります。

```
# gcloud-ra compute networks subnets update range0 --region us-west1 --add-secondary-  
ranges range1=10.10.20.0/24
```

2. 次のコマンドを実行して **aliasip** リソースを作成します。セカンダリーサブネットアドレス範囲に未使用の内部 IP アドレスを作成します。コマンドに CIDR ブロックを含めます。

```
# pcs resource create aliasip gcp-vpc-move-vip alias_ip=UnusedIPAddress/CIDRblock
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource create aliasip gcp-vpc-move-vip  
alias_ip=10.10.20.200/32
```

3. 以下のコマンドを実行して、ノードで IP を管理する IPAddr2 リソースを作成します。

```
# pcs resource create vip IPAddr2 nic=interface ip=AliasIPAddress cidr_netmask=32
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource create vip IPAddr2 nic=eth0 ip=10.10.20.200  
cidr_netmask=32
```

4. **vipgrp** でネットワークリソースをグループ化します。

```
# pcs resource group add vipgrp aliasip vip
```

検証手順

1. 次のコマンドを実行して、リソースが起動し、**vipgrp** の下でグループ化されていることを確認します。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs status
```

2. 次のコマンドを実行して、リソースが別のノードに移動できることを確認します。

```
# pcs resource move vip _Node_
```

たとえば、以下のようになります。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs resource move vip rhel81-node-03
```

3. 次のコマンドを実行して、**vip** が別のノードで正常に起動することを確認します。

```
[root@rhel81-node-01 ~]# pcs status
```